くたばってしまえ

劇団がんばろうな

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴィランの少年、付与川厭士《ふよかわいやし》は彼が崇拝するヴィラン『スケアクロウ』から任務を与えられ、雄英の普通科に入学することになった。彼は与えられた任務、『普通科の生徒をヴィランに引き込む』という任務をこなしつつ、雄英を内部から壊していく――。

※タイトル変更しました。

目次

1、壊れた少年とサイテーな人 ―― 1
2、友達の作り方と誑し方 ―― 12
3、崩壊と××と洗脳と ―― 24
4、異物混入 ―― 36
5、個性：×× ―― 49
6、暴力の伝え方 ―― 61
7、失敗 ―― 73
8、どうせなら君のようになりたかった ―― 86
9、心操は闇の中 ―― 98
10、楔 ―― 109

1、壊れた少年とサイテーな人

――人は生まれながらにして不平等だ。
不平等で、不公平で、生まれで全てが決まる。
それは当然のことだし、当たり前のことだ。だから別にその点についてはしょうがない。
しょうがないから、僕はヴィランになった。
ヒーローに限りはあるけれど、ヴィランに限りはない。
誰にだってヴィランになる権利はあるのだ。
なんとありがたいことか。幸福か。最高じゃないか。
だから僕は、〝付与川厭士（ふよかわいやし）〟はヴィランになった。
ただ、それだけだ。
ヒーローのように最高にならなくていい。ヴィランは気楽だ。
ナンバーワンよりオンリーワン。一人一人皆違って、皆最低だ。
――これはそんな僕が最低のヴィランになった物語。

◆

切っ掛け一つで人は今まで人生を大きく変える。
レールが決められた人間ほどその傾向が強く、大きく変貌する。
僕も切っ掛け一つで人生を大きく変えてしまった。
が、変わることは悪いことじゃない。変わることで人生がより良くなることもあるのだ。
〝医者〟になるという道は消えてなくなり、ヴィランになったが、今までの人生よりも充実している。
初心者大歓迎。週休二日以上でアットホームな職場だ。
成果主義的な部分もあるが、今の所食いっ逸れることなく生活できている。
幸せだなぁ、と思いつつ、僕は職場である建物のドアを開ける。
「おはようございます」
そう言って僕が挨拶すると、席に座り新聞を読んでいた〝彼〟がこちらの方へと顔を向ける。
「やあ。今日も元気そうだね厭士」
そう言って彼こと〝スケアクロウ〟は口角を吊り上げる。
が、目は笑っておらず、その濁った黒には少し緊張した素振りの僕が映る。

相変わらず目が怖いなと思いつつ、辺りを見回しながら返答する。
「おかげ様で毎日が幸せですよ」
「はっはっは。それは良かった」
感謝されるのは嬉しいね、と言いつつ彼は新聞を折りたたむと僕の方へ投げる。
慌てて新聞をキャッチし、彼の顔を見ると、酷く歪んだ笑みを浮かべながら彼は言った。
「私は今最悪な気分だよ」
受け取った新聞を見る。
そこにはでかでかと〝オールマイト〟の記事が載っていた。
「私はね――暴力が嫌いなんだ。人間は知恵を駆使してあらゆる生き物に勝利し、動物という枠組みを超えた。なのにそれを力でねじ伏せるというのは人間への冒涜ではないのかと思うんだ。ましてや正義と呼ばれる者が力で解決して、それが正しい、素晴らしいと褒め称えられる行為はサルの社会とさほど変わらないんじゃないかとさえ思ってしまうよ」
そう言って彼はため息を吐く。
「いやでもスケアクロウも部下に暴れさせてますよね」
「はっはっは。ヴィランなんだから仕方ないだろう？　私が言ってるのはそれが正義と

しての行いと信じ込んでいることだ。まあ、ただの難癖なんだけれども」

――理不尽な話だろう？

彼は僕に問いかける。

僕は頷くことしか出来なかった。

「いつだって人は自分勝手だ。都合が悪いと良いように解釈し、良い部分と悪い部分を掻い摘まんで見る。面白いよな。馬鹿馬鹿しいよな。良い暴力と悪い暴力があるんだぜ。暴力には変わりないのにな」

嘆かわしい、とオーバーな素振りで彼は茶化すように僕に問いかける。

「君もそう思うだろう？」

「はい」

「金で動く特殊警察をヒーローと呼ぶ社会を滑稽に思うだろう？」

「はい」

「無個性の者を差別し、ヒーローになる権利を与えない。不平等な社会はおかしいと思うだろう？」

「はい」

「では雄英に入学したまえ」

「はい……はい？」

耳を疑った。
「ちょ、ちょっと待ってください。どういうことですか……！」
「そのままの意味だよ。ヒーロー育成の最高峰、雄英高校に入学したまえ。なあに、心配しなくても入学の手続きは済んでいる。それにヒーロー科ではなく普通科だ。安心しただろう」
「……突然のことで不安でいっぱいです」
「ははは。ちゃんとお給料は出るからね。いつも通り完璧に任務をこなしてくれ」
「……はい」
スケアクロウの強引さからして大事な任務なのだろう。僕ができるのは了承以外ない。
なんてアットホームで楽しい職場なんだろう。素晴らしすぎて涙が出そうだ。
はぁ、とため息を吐きながら気になっていたことを訊く。
「ところでこの床に這いつくばってる人たちはなんですか？」
「ああこれはね。取り調べに来た警察はぐっすり眠っているね。幸せそうだ」
「もがき苦しんでいるように見えるんですが……」
「そうも見えるね。じゃあ片付けさせよう」
彼は手を叩き部下を呼ぶ。部下たちは警察たちを抱え、どこかへ消えた。

……そろそろ職場が移転しそうだなぁ、と思いつつ僕は新聞の間に挟まっていた入学手続きを読むのだった。

◆

――雄英高校。有名なヒーローをいくつも排出している有名な学校で皆の憧れの高校。そしてヴィランからは魔の巣窟と揶揄されている学校である。僕もヴィランの端くれとして同じような意見だったが、スケアクロウは違っていた。

『雄英にはたくさんの原石が眠っている。ヒーロー科じゃなくて普通科の方にね。彼らはずっとヒーロー科のおまけ、比較対象として扱われるんだ。嫉妬や鬱憤も溜まっているだろう。君はその中でもヒーロー科を目指していたが落選した者の個性をピックアップしてこちらへ引き入れてほしい。出来ればサポート科からも何名か欲しいが……彼らは難しいだろうから普通科に絞ってくれ。別に無個性でも使えない個性でもなんでも引き入れそうなら入れてくれてもかまわない。初心者大歓迎だ。じゃんじゃん悪の道へと引きずりこんでくれたまえ。期待しているよ』

要は『人手不足だからチンピラ以外の人手がいっぱい欲しい。即戦力が特に欲しい』ということだろう。

僕の役割は人事……まあ、スカウトみたいなものだ。光には必ず影がある。その影を闇へと勧誘するお仕事だ。

シンプルで素敵なお仕事だ。頑張ろう。

どうやら今年からオールマイトが講師になったらしい。なのでより強い憎しみや嫉妬を抱くだろう。うれしい限りである。あとはどのようにヒーロー科と対立させ、人材を確保するかという状況だ。

……まあ、何とかなるだろう。楽観的にいこう。

と、そんな時スマートフォンが震える。

電話だ。相手は――うん。予想通りスケアクロウではない。

彼の本業（実際は副業）は医者であるため平日は基本的に忙しいのである。

「もしもし」

『はーい厭士くんおっ久しぶり～。元気でしたー？』

「僕はいつだって元気だよ。目から血が流れるぐらい元気」

『え、血が出るほど？　欲しいな厭士くんの血。うん、欲しい。コップ一杯ぐらい欲しいな！』

何ともサイコな発言をしている彼女は渡我被身子（トガヒミコ）。僕の幼馴染であり、連続失血事件の犯人だ。彼女はスケアクロウが苦手とする暴力が必要な仕事を与えられていた筈だ。

彼女の戦闘スキルはヒーローに適用するレベルなので彼は彼女を重宝している。
「で、僕に何か用？」
『えっとですね。えへへ……ちょっとデートしてほしいなぁって」
「ん～。トガちゃんは積極的だねぇ」
『えへへ……！　で、どうかな？』
「うーん、今どこにいる？」
「後ろ！」
そう言ってトガちゃんが後ろから飛び出してきた。
まさか過ぎる。いや声全然聞こえなかったんだけど。相変わらず謎が多い少女である。
まあ、でも都合がいいのでちょっと手伝ってもらおう。
「ちょうど良かった。ちょっと荷物が多いから人手が欲しかったんだ」
「じゃあ事務所までデートですね！」
そう言って屈託のない笑みを見せるトガちゃんに癒される僕。
無邪気で可愛らしい。どこで付いたのかわからない頬っぺたの血がその無邪気さを引き立てている。
最高にキュートだ。可愛いねトガちゃん。

「で、これなぁに？」
「雄英の内部機密」

◆

入学式から一週間が経ち、環境に慣れたタイミングで早退し、担任から拝借した予定表やスケアクロウから斡旋してもらったヴィランによってコピーを作成することに成功した学園の図面。等々、気づけば一人じゃ持ち運べない。持ち運べば怪しまれる量になっていたため、トガちゃんの存在はありがたかった。
しかも暴力担当なこともあって普通の女子なら持てなさそうな荷物も軽々と持てる。たくましいぜトガちゃん。
けど女の子にたくましいとか言ったら駄目なので愛しいに置き換えよう。愛しいぜトガちゃん。
「厭士くん厭士くん！　デートだよデート！　たのしぃね！」
きゃっきゃとはしゃぐトガちゃんを見ると思わず笑みが零れた。
なんと充実した人生だろう。幸せすぎる。とってもハッピー。スペシャルハッピー。今日はトガちゃん記念日だ。幸せすぎて怖いね。

「じゃあ、ちょっと血ぃ貰うね！」
そう言ってトガちゃんは僕の腹部にナイフを突き刺した。
げふっ、と吐血しつつ鋭い痛みに意識を失いそうになるも、寸前で耐える。
相変わらずの行動力お化けっぷりに涙しか出ない。突拍子のない行動に定評がありすぎる。
「しょうがないなぁ」
ちうちうと血を謎の装置で回収するトガちゃん。そしてあまりの痛さに手が震える僕。
そろそろ死にそうなので死なないよう足掻くべく、近くにいた人に狙いを定め――。
――とナイフに刺された致命傷が完全に回復した。便利な個性である。
そんなわけで僕は全回復しハッピー。トガちゃんも僕の血を採血出来たのでハッピー。
皆ハッピーだ。皆笑顔で皆いい。急に人が倒れたからか人が集まっているけれど、僕らには関係ないことだろう。人の人生に干渉するほど人が出来ていないのだ。
ヴィランだからしょうがないね。
とりあえず服が血まみれだと目立つので僕は自分の鼻を全力で殴り、鼻血を出したことにして誤魔化す。

なんという豪快な鼻血だとすれ違う人は思うのだろうか。まあ思わないだろう。早くこの場から離れよう。

「行こうトガちゃん。このままじゃ僕は出血多量で死んじゃいそうだ。死なないけど」

「矛盾だね厭士くんっ。あっはっは！」

「ごめん。何が面白いのかわかんないや。わはは」

とりあえず笑ってみるが何も面白くなかった。ダラダラと情けなく鼻血が流れ出し、とても気持ち悪かったので個性を使用し、鼻血を止める。またしても人が倒れたが熱中症だろうか。水分補給はしっかりしよう。

「ああ、忘れた。トガちゃん――もし、新しいお友達が増えるならどんな個性だと嬉しい？」

「個性……？　そうですねー、〝人を思いのまま操る〟個性なら面白いです」

なるほどね。

じゃあ探そう。人を操る個性。

楽しみだなぁ。と僕は期待に胸を膨らませながらトガちゃんと一緒に雄英の内部機密を持ち帰るのだった。

2、友達の作り方と誑し方

資料を渡し終えた後、僕は誑しのスペシャリストことスケアクロウにアドバイスを貰うことにした。

スケアクロウは弱っていた僕を誑し込んだ実績のある人誑しだ。都合のいい言葉を並べ、欲しかった言葉を差し出し、一気に絡めとる。その手腕は流石と言わざるを得ない。

「――人の誑し方？」

「私は人を誑すような器用な真似は出来ないよ。強いて言うなら……そうだな。相手の気持ちを考えながら行動することかな。相手の立場になって考えるんだ。どういう言葉が欲しいのか。何を言われるのが嫌か。一つ一つ慎重に言葉を選んで、最後のピースが当てはまるまで選んで、パズルが完成したら人は簡単に落ちる。呆気ないだろう？」

そう言ってスケアクロウは憎らしく笑う。

これが全てというわけではないだろうが、人の誑し方入門編といったところだろう。

正直な話、彼が被害者相手にここまで話してくれるとは思わなかった。

もう大丈夫と判断したのだろうか。ここで僕が彼に個性を使用したらどうなるのだろうか。

――どうなるのだろうか。

「――私に個性を使おうとなんて思わない方がいい。大人だから子供の我儘に付き合って貰えると勘違いするのか？　目には目を、暴力には暴力。個性には個性だ。厭士、君は好奇心で全てを棒に振る程度に愚かだったか？」

「……やだなぁ。そんなこと考えてませんって。神に誓ってもいいですよ」

「なら良かった」

と、そんな和気あいあい会話があり、色々と試してみようと思った。

とりあえず、ヒーロー科への悪評を流すことにした。

――ヒーロー科は普通科を自分を引き立てるモブにしか見えておらず、常日頃馬鹿にしているヒーローらしくない者ばかりである。彼らがヒーローになりたいのは正義感ではなく、ただ金欲しさで、助けを求める人も飯の種にしか見ていない。

と、嫉妬丸出しの噂を垂れ流す。適当な嘘なので殆どの者は聞き流すが、ほんの一部の人間はその噂に食いつくだろう。そのほんの一部を探すのが僕の仕事である。

こういう詐欺に引っ掛かりやすい人間をあの手この手で誘惑し、引き入れる。

ありえない嘘であろうとも、自分の都合の良いことだけ取り入れる者は騙しやすい。

まあ、二、三人ぐらいが目標だ。少しずつ少しずつ引き入れていこう。

◆

なぜか上手くいった。

予定では二、三人程度引っ掛ける予定だったが、普通科の殆どが騙された。

いや、正確には適当な嘘がわりと当たっていたようである。

どうやら本当に人をモブ扱いする素晴らしいヒーローの卵がいたようで、それが上手く噛み合ったみたいである。ヒーロー様々。名も知らぬヒーローに感謝しよう。

というわけで土台は整った。

後は――。

「厭土ー、一緒にマック行こうぜー」

「おっけー」

友達作りだ。

◆

どの集団にも一定の数、集団を嫌う者がいる。
とりあえず批判したい者、周りに馴染めない者、嫉妬に狂った者、エトセトラエトセトラ。
そういった者たちは自分と同じ思想の元の人と集まりやすい。
僕をマックに誘ったこの三人は他の人たちに比べて一段とヒーローを嫌う者たちだった。
「ほんと嫌になるよな。ヒーロー科ばかりちやほやしてさ」
「そうそう。学校が差別を助長してる。それは教育機関として問題があると思うんだ」
「俺たちだって同じ生徒なのに酷い話だよ全く……」
彼らの言葉には確かにと思う部分もある。ただ、このような声は全て嫉妬として扱われてしまうのだ。
それほど雄英のヒーロー科というのは世間的にも大きなものなのである。
彼らがどうしてその雄英を選んだのかはわからないが、彼らにとって雄英のヒーロー科という花形の存在は酷く煩わしいのだろう。ああ、わかるよその気持ち。……いや、わからないや。
「確かに酷い話だよね。僕らは純粋に雄英の充実した設備と、難関大学への進学率で選んだのにさぁ」

にい、と笑いつつ釣り糸を垂らすように言葉を投げかける。
「そ、そうだ！　俺たちはヒーロー科じゃなく普通の高校として入ったんだ!!　なのに周りは皆ヒーロー科ヒーロー科って……」
「おまけ扱いって酷い話だよな！」
「これだから雄英は……」
と、またしても雄英の批判が始まり僕はにこにこと微笑んだ。
最初に同意した彼は恐らく、ヒーロー科への嫉妬だ。心のどこかでヒーロー科に転入したいという願望が透けて見える。後の二人は文句を言いたいだけだろう。もう少しばかり時間が必要だ。
けれど、最初の彼はもう問題ないだろう。
そう判断した僕は彼に狙いを定めた。
そして時間が経ち、楽しかった放課後マックが終わる。
「ちょっといいかな。君に見せたい場所があるだけど、行かない？」
――そう言って僕は彼を勧誘した。
ヒーローについて何か思うところがある人の集まりで、皆で意見を交換しあったり、ヒーロー主義的な社会を議論し合う場所であることを告げると、少し興味がありそうなそぶりを見せる。

彼は心のどこかで自分はヒーローになれないと諦めつつも、その一歩が踏み出せないでいる状態だ。
だから彼はその憧れを自ら捨てる切っ掛けを欲している。
なので僕はその切っ掛けを与えることにした。
誰かが困っているとき、助けるのは人間として当然だ。
喜んで背中を押して、ヴィランの道へと突き落そう。
「主催はね、僕の知り合いのおじさんなんだ」
君のような人を探してる人でね、話が合うと思うよと僕は新しくなった事務所のドアを開ける。
「やあ」

◆

次の日、彼は学校に来なかった。
病気ではないようだが、どうも体調が優れないらしい。
……まあ、明日には来れるだろう。スケアクロウがそう言っていたのだから、そうに違いない。

ここに来て初めての友達だからか、とても心配でしょうがなかった。
彼の個性はあまり役に立たなさそうだが、十分役割がある。
なので元気な姿を僕に見せてほしい。そうじゃないとヴィランに引き入れた意味がなくなってしまう。
さて、ある程度の人数は確保出来そうだが、どれもこれも個性は突飛なものではない。
もっとぶっ飛んだ。そう、トガちゃんが言っていた人を操るような個性が落ちてないものか――。
「えっ、心操くんの個性って『洗脳』なんだ～！　凄いね！」
「……ははっ、そんな強力な個性じゃないよ」
――落ちてた。
僕は廊下で駄弁っている彼に目を付けた。

◆

心操人使（しんそうひとし）。個性、『洗脳』。彼の問いかけに答えると洗脳のスイッチが入り、彼の思い通りに操ることが出来る。ただし、衝撃が加わると洗脳は解ける。洗脳は彼の意志で自由にできるため、使い勝手はいい。どちらかと言えばヴィラン向けの能力だが、使い方

次第ではヒーローに――。

「向いてないだろう。目立つ仕事のヒーローがそんな弱点一つで無個性と化す個性で活躍できるわけない――」

そう言ってスケアクロウは僕が調べた心操の情報を見てにやにやと厭らしい笑みを見せる。

「だが、ヴィランには向いている――。最高だ。洗脳を自由にできる部分と明確な弱点がある部分が特にいい。こちらが弱点を握りさえすれば彼の洗脳が無意味と化す。が、彼を知らない者は洗脳することが出来る。――トガヒミコ以来の優秀な人材――そう思わないか厭士」

スケアクロウは浮かれていた。

それもそうだろう。ただの鉄砲玉――人材集めが目的で、個性の強さなど二の次だったが、予想以上に協力な個性が、それもヒーロー科ではなく普通科で見つかった。

あまりにも運がいい。彼のシナリオを超える展開だ。浮かれてしまうのも無理はない。

この浮かれっぷりは僕をヴィランにした時、トガちゃんを引き入れた時以来だ。

――失敗は許されないだろう。

「同意見です」

「ならよし。では任務を変更しよう。――どんな手を使ってでも心操人使を手に入れろ。人材確保は二の次でいい。最優先事項だ」
「了解致しました。では僕はこれで――」
「ああ、待った」
スケアクロウは出ていこうとする僕を引き留め、その濁った目をこちらに向ける。
「――ちょっとお茶しない？」

◆

「コーヒー二つ。ミルクと砂糖はどちらも一つでお願いします」
かしこまりました。と店員は頭を下げその場から離れる。
少しの間静寂に包まれ、しばらくすると店員はコーヒー二つテーブルに置くと、そそくさとその場を離れた。
誠実そうだがどこか胡散臭い雰囲気のある男と、制服姿の少年。そして会話の一つもない。そんな所に一秒でも長くいたくないだろう。
僕は黙ってコーヒーにミルクを注ぎ、砂糖を入れるとマドラーでかき混ぜた。
「で、要件はなんですか。わざわざ場所を変えるなんて他の人に聞かせたくなかったか

らでしょう」
「まあまあ、とりあえず一息吐こうじゃないか。ここ最近色々と任務を押し付けて悪かったね。今日は私の奢りだ。沢山注文したまえ」
そう言ってコーヒーを飲む僕を見ながら出来る上司のような口ぶりのスケアクロウ。
お言葉に甘えて一息吐かせてもらうことにした。
こうしてゆっくりするのも久しぶりな気がする。最近は特に忙しかし、環境の変化もあってか疲れが取れていない。そういう意味ではありがたかった。
「そんな大事な話ってわけでもないんだ。ただ、――雄英を襲撃するだけだよ」
「……っ!? げふっ……!」
危うくコーヒーを吹きそうになるも寸前で何とか飲み込むことが出来たが、あまりの衝撃にむせてしまった。
そんな姿を見てスケアクロウはにやにやと笑う。
……相変わらず性格が悪い。最高にヴィランだ。
「それだと僕の潜入が無意味になりませんか?」
「ああ、違う違う。私たちが襲撃するんじゃないんだ。どうやら別のヴィランが私らのように団体で行動するようになったみたいでね。ヴィラン連合というらしいんだけど、数が足りないから適当なヴィランを貸すことになったんだよ」

「ヴィランが……団体で……」
ヴィランの個々は強いので基本的には群がらない。だからヴィランは連合を組むことはないが、特例はある。
スケアクロウのように強いトップが無理やり集めるパターンだ。おそらく、そのヴィラン連合とやらも強いトップが無理やり従わせているのだろう。
……少し興味が湧いてきた。
「で、今後私たちがヴィラン連合に入る可能性が出てきたので話し合いをしようということになってね。雄英にいる君には是非とも参加してもらいたんだ」
――そう来たか。
スケアクロウはヴィラン連合とやらに入ると言いつつ、トップ次第ではそのまま根こそぎこちらに入れようと考えているのだろう。強力な個性は心操を引き入れさえすればしばらくは問題ない。わざわざ普通科の一般人をヴィランにするよりはすでにヴィランの者を引き抜く方が手間が省ける。
「わかりました。予定を開けておきます」
「よろしい。で、トップの者の名前だが――」
――死柄木弔（しがらきとむら）と言うんだ。
「……変な名前ですね」

「ははっ。君が言うなよ厭士ぃ～」
「ははは。案山子（スケアクロウ）とか自称している大人に言われたくないですね」
はっはっは、と二人して笑い、拳が飛び交う。
上司であろうと社長であろうと関係ない。ヴィランは自由なのだ。
だから最低だ。最低で、馬鹿馬鹿しい。
なので一発だけぶん殴ってやろう。
そんな馬鹿馬鹿しい喧嘩は店員に止められるまで続いたのだった。

3、崩壊と××と洗脳と

この世に正義が蔓延る限り、悪は滅びない。
だってそれが正義の存在理由だから。正義がいるのは悪のおかげだ。
持ちつ持たれつ。お互いに支え合って正義と悪は共存している。いや、どちらかと言えば共依存だ。
どちらかが消えてしまえばもう片方も消えてしまう。だからお互い心のどこかで相手を思いやっている。
これを言葉にするのなら、正しく愛というやつだろうか。
両想いで素敵じゃないか。ロマンチックじゃないか。
なんて素晴らしいんだろう。素晴らしく平和だ。
「――とまあ、ここで生徒を襲えば批判は雄英にしか目が行かない。面白いだろう？」
「……なるほど、な。そりゃ面白い。……乗った。あんたは信用できないがその考えは馬鹿馬鹿しくて俺好みだ」
「ありがとう。君とは趣味が合いそうだ」
そう言ってスケアクロウと彼、死柄木弔は笑う。

スケアクロウは死柄木とその部下である黒霧を事務所に入れ、これからについて話し合っていた。

片や私利私欲のためにヴィランを集めた男、片や革命を起こすべくヴィランを集めた男。

これからのヴィランの運命は彼らの手にかかっているのである。是非とも頑張ってもらいたいものだ。

「で、こいつは誰だ……？　後ろで突っ立って――護衛のつもりか？」

そう言って死柄木は僕を指さす。

別に護衛になったつもりはない。スケアクロウにそこに突っ立っておけと命令されたから彼の後ろに立っているだけだ。いざとなったら守ろうだとかそんなことは考えていない。彼なら僕などいなくとも対処するし、それで死ぬのであればその程度の人間だったというだけだ。だから彼を守るつもりなんてさらさらない。

「そう、護衛だ。彼は強力な個性を持っていてね、いずれ君も必要になる時が来るだろう」

「はぁ、必要な時か……」

ふぅん、と品定めするようその顔に付けた手の隙間からおどろおどろしい目を僕に向ける。

僕は何も言わず、ただ突っ立って彼を見ていた。
「――面白い」
唐突に彼はスケアクロウに飛び掛かる。
――間に入った僕が彼を突き飛ばし、彼は壁に叩きつけられた。
彼の顔から付けていた手が床に落ちる。
「見せてもらおうか。その強力な個性とやらを――まあ、手遅れかもしれないが……なぁ」
にぃ、と歪んだ笑みと憎しみに満ちた目がはっきりと僕の目に入る。
と、腹部に激痛が走る。
――身体が崩れている。
ボロボロと、僕の身体から砂のように零れ落ちていく。
その崩壊していく様はどこか奇妙な魅力があり、少し見惚れてしまった。
ああ、なんて酷いことをする。死んでしまうではないか。
日頃スケアクロウが言っているだろう。暴力は良くないと、対話こそが人間の取るべき行動であると。
悲しいことだ。嘆かわしい。
しょうがない。と、僕は近くにあったそれに〝手を伸ばした〟。

「酷いなぁ。どうして無関係の僕がこんな目に合うんだろう」
「それは君が突然間に割り込んでくるからだよ厭士」
「そうですね。対談の邪魔をして申し訳ありません。スケアクロウ」
「気にしてないからいいよ別に。じゃあ彼にも謝ろう。人をいきなり吹っ飛ばすなんて、そんな暴力的な人間に育てた覚えはないよ」
「それもそうだ。ごめんね、えーっと、死柄木くんだっけ？　大丈夫？　ああ、怪我してるね」
――じゃあ治そう。
僕は彼に触れ、その怪我を治した。
「――治癒系の個性か」
「そう、でもただ回復するだけじゃなくてね――ああ、これは企業秘密だった。聞かなかったことにしてくれ」
「――――」
その時の死柄木の目は、侮蔑ではなく、同類を見るような眼をしていた。
その瞳の奥底で、笑っているような、奇妙な笑みを見せつつ彼は黒霧に一声かけ、その場を立ち去った。
ただ、彼は近くにあった観葉植物が枯れてボロボロとその葉を落としている様が気に

なったらしく、しばらく見ていたが、どこか納得がいったらしくふん、と鼻で笑った。
……ばれたかな。まあ、ばれても問題はない。
彼はヴィラン。味方なのだ。味方にばれたところで、問題ないだろう。
まあ敵になれば別なのだけれど、ね。

◆

ヒーロー科にはヒーローになるための教科が用意されており、その中の一つである救助訓練の最中を狙うのがヴィラン連合の狙いだった。そこでスケアクロウは僕が集めた資料と狙うタイミング、そしてメリットを考え、どう転んでもヒーロー側の負担が大きいことを伝えると作戦は実行されることになった。
スケアクロウは必要ない部下、使えない者をヴィラン連合に派遣し、ヴィラン連合は人員を増やすことに成功。お互いにメリットのある形で落ち着いた。
死柄木はオールマイトに致命傷を負わせると奮起していたが、スケアクロウは不可能だと考えていた。
理由は完全なる力不足。
彼の力は下手な小細工さえもゴリ押しできてしまうほどの理不尽だ。それを黒霧、死

柄木の個性だけで対応するのは難しい。何やら隠し玉も用意しているみたいだが、圧倒的に戦力が不足しているので成功率は良くて五パーセントといったところだろう。

けれど五パーセントでも十分に可能性があるので純粋に力を貸したのである。

それと、彼はもう一つ、彼の背後に大きな存在がいるだろうと考えていた。

それも大きな存在。オールマイトと同等、いやそれ以上の理不尽がバックにいると理解し、スケアクロウは乗っ取りという最初の路線を変更し、出来る限り協力することにしたのだった。

彼が最初の計画から変更するということはそれほど強大で手を付けれない何かがいるのだろう。

なので基本的に彼らには逆らわず、僕やトガちゃんを派遣するという可能性も出てきた。

まあ、出来る限り仲良く、平和的に終わりたいものだ。

「――とまあ、そんなわけでオールマイトのおかげで何とかなったらしいよ」

「……詳しいな。どこでそんな情報仕入れてくるんだ？」

「そいつはちょっと企業秘密でね。教えられないかな」

僕は情報源が気になっている〝心操〟にそう答えた。

あれから少しずつ偶然を装い、彼に近づき、ヴィランに引き入れた友達を使い上手く

彼と友人になることが出来たのである。
洗脳という個性を持っているので人を従わせる願望でもあるのかと思いきや、意外や意外、何とも普通……いや、立派な正義感を持った少年だった。
僕から言わせてみれば、個性は中身だ。
個性がわかればその人物がどういう人なのかがわかる。
好きな人になりたいトガちゃんは〝変身〟、人のトラウマが見たいスケアクロウは〝フラッシュバック〟。
そして僕は……まあ、この話はどうでもいいか。
そんなわけで、個性を見ればその人の中身がある程度わかるというのが僕の考えだったのだが。
どうやら改めなければならないようである。
「いいなぁヒーロー科は。オールマイトとの接点があって」
「心操くんもオールマイトのファンだっけ」
「ああ、ってか大体のやつがそうだろ。ファンじゃないお前が珍しいよ」
「ははは」
ヴィランですし。
「変わってるよなお前も。治癒系の個性だったら医者でも目指しているのかと思ったけ

ど、そうじゃないんだろう？」
「そうだね。僕がなりたいのは――」
――ヒーローだ。
そう言って僕は心操の顔色を伺う。
彼はそんな僕をどこか羨まし気に見ていた。
「お互いに編入を目指す者同士、頑張ろう心操くん」
「あ、ああ……そうだな」
心操は不安そうに答える。
――個性のコンプレックス。彼の個性は強力であるが、ヒーロー向きではない。
ヒーローは人々に安心を与えなければならないのに、洗脳という個性はやはりヴィランを連想させてしまい、快く思わない者も多く出てしまうだろう。
なんて面倒なんだヒーロー。守るべき大衆のご機嫌も伺わなければならないなんて、面倒だなヒーロー。
なのにヴィランはどんな個性でも無個性でも大歓迎。守るべき者なんて自分の身ぐらいだ。気楽すぎる職種。
そんなわけで天職であるヴィランに誘いたいのだが、どうも彼のヒーロー願望は強すぎる。

ここでヴィランに誘えば通報されておしまいだ。
なので少しずつ彼のヒーローへの道をへし折っていかなければならない。
選ばれた者しかヒーローになれない。努力は無意味で、正義感も無駄。表舞台には立てないのだと希望を一つ一つ砕いていく必要がある。
その時、彼はどんな顔をするのだろうか。
楽しみだ。
「じゃあ雄英体育祭狙いってことだね」
「そうだな。そこでいい成績を残して――」
――俺はヒーロー科へ編入する。
彼の決意は固く、冗談で口にしているのではないことがはっきりとわかる。
が、結局はヒーロー科への僻みの延長上。彼はただの嫉妬ではないよう振舞っているが、ヒーロー科への編入を考えているにも関わらず身体を鍛えることもせず、個性一つで乗り切ろうとしている。
初見殺しのような能力一つでそこまで進めるのだろうか。
まあ、僕も初見殺しなのだから人のことは言えないのだが。
そう思うも、僕はアドバイスしない。だって彼が強くなって勝ち進んだら本当にヒーロー科に編入してしまうかもしれない。そんな可能性の芽は摘むに限る。

僕は彼の友達として、彼が活躍できる場を提供するだけだ。
なので頑張ってヒーローになる可能性を消していこう。
心のどこかでヒーロー科に入れるのを期待してかそわそわしている心操を横目に、僕は持っていたシェイクで抑えきれない笑みを隠した。

◆

「そんなわけでトガちゃん。洗脳の個性の人を見つけてさ、今口説いてるとこだよ。堕とすまでにはしばらく時間がかかりそうかな」
「いいねぇ、洗脳！　自分の思い通りに相手を操れるんだよね！　相手を自分色に染めれるんだよね！　それってとってもロマンチックでファンタスティックだよね厭士くん！」
「ははは。わけわかんねえ」
心操との放課後マックの帰り、偶然出会ったトガちゃんと一緒に帰ることにした。
トガちゃんは一仕事終えた後らしく、頬っぺたに返り血が付いていた。
これでよく捕まらないよなぁ、と思いながら僕は彼女の血をハンカチでふき取りつつ、心操のことを話した。

「でも私は相手の色に染まりたいタイプだからちょっと違いますねぇ」
「そうだね。トガちゃんとは真反対だ」
「けど、洗脳っていいね！　お仕事が捗りそうで、便利そう！」
おお、トガちゃんが仕事の話をするとは。今日は槍でも降るのかもしれない。
好き勝手する猫みたいな子だと思っていたので仕事への意識なんてないと思ってたのでわりと衝撃的である。
彼女にも何かしらの変化があったのだろうか。そう、仕事に興味を持つ切っ掛けのような相手でも現れたのだろうか。……ううむ、嫉妬してしまう。娘のように接してきたのでちょっと悲しい気持ちだ。
「トガちゃんは仕事熱心だね。関心関心。仕事熱心なトガちゃんにはそこのクレープでもプレゼントしよう」
「あ、じゃあイチゴのやつがいいです！　ホイップたっぷりのやつ！」
トガちゃんはこの前初任給を貰ったばかりだったのでこれは僕からの初任給祝いだ。
祝いにしては安すぎるが学生という身分なので許してほしい。
「ん～～～!!　クレープ美味しいね厭士くん！」
「うん、なんか甘くて……べたべたしてて美味しいね」
「……厭士くんって本当食事に無関心ですよね」

トガちゃんは僕を憐れむような目で見ながらそう言った。

……今度からはもう少し食事に関心を持とうと誓った。

4、異物混入

言い忘れていたことだけど、ヴィラン連合の襲撃は失敗に終わった。
特に興味はなかったので少ししか触れなかったが、彼らの隠し玉である〝脳無〟は捕獲され、ヴィラン連合の殆どは捕まった。
スケアクロウはいい在庫処分が出来たと言わんばかりの様子でご機嫌だった。
まあ、あれで倒せたのであれば苦労はしない。
ヒーローが強敵であればあるほどヴィランはしぶとく蘇るのだ。
ヒーローは少数精鋭が基本なのでヴィランは数を用意しなければならない。
そのための僕だ。元気溢れる普通科の皆を悪い子にしてあげよう。
今は十人ほどだが、いずれ普通科の殆どの生徒をヴィランに引きずり込もう。
それが僕のお仕事だから。
「今日は雄英体育祭だー。普通科でも頑張ればヒーロー科に編入出来るかもしれないから、皆頑張れよー」
担任の軽い言葉はジョークだったらしく、クラスメイトはどっ、と小さな笑いが起こる。

そう、体育祭はヒーロー科がメインだ。
個性の誕生により衰退したオリンピックの代わりと化しているらしく、日本全国で中継されている。
勿論、それを有名なヒーローたちは見ており、欲しいと思った生徒をスカウトしたり、とヒーロー希望の生徒たちが自分を売り込む場である。
だから僕がそれをかき乱そうと思う。
スケアクロウからの追加任務、『雄英体育祭でいい成績を残せ』をクリアしなければならないのだ。
いい成績とはまあ、上位ということか。とりあえず目立てという意味なのだろうか。
わからない。が、勝たなきゃいけないらしい。
とりあえず、心操に会っておこう。
と、廊下に出ると心操がいた。
心操の他にも数人の普通科の生徒がいる。
その中には僕がヴィランに引き入れた男もいた。
「A組に行こうぜ厭士。どんなやつらがいるのか一度見ておきたい」
ああ……今日はいい日になりそうだ。

◆

僕らが向かったのはヒーロー科、Ａ組の前だった。
彼らはヴィラン連合に襲われたが生還したクラスである。
何とも頼もしい。出来たらこちらに欲しい人材である。良い部下になりそうだ。
と、職業病が出つつも僕は彼らを観察する。
……何というか、個性豊かだとだけ言っておこう。
心操は入学試験で落ちたが、彼らは合格するレベルに達しているのだろうか、少し不安になる。
ただ、今の僕は普通科生徒Ｂだ。宣戦布告する心操を後ろで見守るだけのモブだ。
僕は先に挑発した少年の情報を調べるよう僕の隣にいたヴィランの生徒に目で指示する。
彼は頷きつつ心操の言葉に共感している素振りを見せる。
中々優秀だ。スケアクロウに昇進させるよう伝えておこう。
「行こうぜ、厭士」
そう言って心操は離れるように言う。
僕はヴィランの彼に他のメンバーを引き連れて離れるよう指示し、僕は心操に近づい

た。
「油断するなよ心操くん。彼らは雄英の試験に合格した個性の面々だぜ」
「……」
途端、彼の顔は青ざめる。嫌なことでも思い出したのだろうか。可哀想に。
「安心しなよ。僕も君がヒーローになるよう全力でサポートするからさ」
「……お前はいいのか？」
「僕……？　ははは っ、僕の個性じゃちょっと難しいかな。僕の個性は治癒系だしね」
「そう、か……」
僕は見逃さなかった。
心操は今ほっと安心したその仕草を、見逃さなかった。
自分よりも勝ち上がれそうにない僕を見て安心したのだろう。
仲間だなんだと言っても結局は敵同士。限りなくゼロに近い、普通科編入という切符を取れるかもしれない相手はいない方がいい。だから僕が諦めて彼のサポートをするかのような発言は彼がたまらなく欲しかった言葉だ。
人間らしさが出て面白いなぁ。と思いつつ僕は歪に吊り上がりそうになる笑みを噛み殺した。
「僕は普通科の誰かがヒーロー科になるのを見たいんだ。心操くん、僕は君が一番普通

科でヒーローに近いと思ってるよ」
欲しいであろう言葉を彼に渡していく。
そうやって褒め殺し褒め殺し。
信用を勝ち取った。
普通科で腐りきっている少年を応援する少年Bとして、彼の舞台に入ることが出来た。
なるほど。スケアクロウもこれが狙いだったのか。
これで後は僕が彼よりいい成績を出せばいい。そういうことだろう。
じゃあ目指さなくちゃだ。
ヒーローを目指そう。そのためにはヒーロー科に入らなくちゃな。
わはは。最高のヒーローを目指そうか。最高だな。ははは。
そう、これは僕が最高のヒーローを目指す話だ――。

◆

そして雄英体育祭が始まる。
雄英体育祭のメインは僕ら一年生ではなく、三年生だ。

なので僕らはおまけのようなもの……と言いたいのだが、どうもヴィランの襲撃にあったA組を見たいからか会場は人で溢れていた。

ヒーローに囲まれているというヴィランとしては最悪の状況である。まあ、僕は目立ったことはしてないので顔やら何やらはばれていないから問題ないが、やはり冷や汗を掻いてしまう。

「これだけ人がいると緊張しちゃうね心操くん」

「……」

「心操くん……？」

どうやら僕の声も聞こえないぐらい集中しているようだ。

そりゃそうだ。このチャンスを逃せば次は来年。入るなら出来る限り早いうちでないと周りと差が出来てしまう。まだ入学したばかりの今を狙うのが得策だろう。

「お互い頑張ろう――」

僕らの目標は勝ち上がることだ。

たとえゴールが違っても、道は同じなのだから。

◆

『さあ、始まるぜ雄英体育祭、第一種目〝障害物競争〟！　実況は俺、プレゼント・マイクでお送りするぜ！』

そう言って僕ら一年生は狭いスタート地点に押し込まれる。

人がいっぱいだなぁ。まあ、その方が都合がいい。人がいればいるだけ個性が使いやすくなる。

後は……そうだな。心操くんにはとりあえず勝ち上がってもらうことを祈りつつ、自分の準備をする。

『用意はいいか？　じゃあ行くぜ……スタートォォォ!!!!』

プレゼント・マイクの合図と共に皆が一斉に動き出す。

と、生徒の一人が先頭へと繰り出した。

彼はえっと……ああ、そうだ。あらかじめ情報を調べていた少年だ。

確かエンデヴァーの息子の――轟だっけ。

その瞬間、彼が先頭に出た理由がわかり、僕は咄嗟に周囲の生徒を使い、上に飛び上がる。

刹那、地面が一瞬にして凍った。

彼の個性は燃やしたり凍らしたり出来る便利な個性だった。危ない危ない。油断してた。

油断するなと言いながら油断するとは情けない。油断大敵だぜ僕。
「酷いことするなぁ」
思わずぼやきつつも僕は足が凍ってしまった彼らを放って先へ行く。
僕の個性は戦いに向いていない。そしてこういった競争にも向いていない。
なので雄英体育祭にミスマッチだ。けれどもいい成績を残さなくてはならないので個性を使用せず勝ち上がることが求められている。
とは言え、内容はヒーロー科の試験を強化した程度だ。大体のことは何とかなる――。
「あっ――」
僕は崩れた試験用のスクラップに押しつぶされた。
下手したら死ぬレベルのダメージだ。しょうがない。分散しよう。
じゃあ三人ほどで。と先ほど念のために準備していた個性を使用する。
「痛っ……あー、危なかった」
……これ、ヒーロー科以外のこと考えてないんじゃないだろうか。
もしかするとこれ放っておいても問題ないのではと思ったが、雄英のことだから何か策があるのだろう。
そういえば雄英にも治癒能力持ちがいたんだっけ。

治癒能力がいるから怪我しても問題ないというのは共感が持てる。
崩れても崩れても治せばいい。結果論で語っていこう。
ただ、考え方が少しヴィランだ。それともヒーローが助けることを前提で計画しているのだろうか。
なら、僕がダメージを負ったのは失敗じゃないか。
『あ、アクシデーンツ!?　おいおい普通科の生徒が巻き込まれたぞー!!　大丈夫かー!?』
「……僕は大丈夫ですよー」
そう言って僕は手を振る。
ここで下手に時間を食うわけにも行かないのでそのまま先へと進む。
周りから個性がばれただろうか。背後で倒れている彼らと結び付けられるだろうか。
ばれたらばれたで面白いが面倒だ。気づかない振りをしておこう。
次は何とも珍妙な綱渡りだ。
これは難なく乗り越える。
そして次、地雷原の中ゴールへ向かうだけ。
地雷の威力はなく、音だけだそうだが、十分に危険だ。
……危険なのか。ちょっと気になる。なので地雷に触れてみる。
ばぁん、と地雷が稼働し、躱した僕を置いて背後にいた生徒が吹き飛ばされる。

そこまでの威力はないが、十分に危険じゃないか。
少し怪我をしたので回復。これで問題ない。
『おおっと地雷によって吹き飛んだぁ!!　……起き上がらないが、大丈夫？　ちょっとー救護班ー！』
想定以上に怪我人が続出しているようだ。いやー、怖いなぁ。
そう思いつつ僕は個性を使い、人数を削りつつゴールする。
順位は二十位台。まあまあいいところに食い込んだと思う。
「よう厭士、やっぱり残ったか」
声がした方へ顔を向けると心操がいた。
心操は周りがヒーロー科ばかりで心細かったのか話せる相手を見つけた彼は緊張が解れた様子だった。
顔つきは怖いが内面は何とも普通である。だから見てて飽きないなぁ、と思う。
「ははははっ、何とか残れたよ。心操くんはどこか余裕そうだね」
「余裕なわけねえよ。心臓バクバクだ」
二人してそんな会話をしつつ、辺りを見回す。
やはり、ヒーロー科しかいない。つまり、周りは敵だらけだ。
ただ運良く生き残っただけだとでも思っているのだろうか。少し不思議そうな目で

僕らを見ている。
彼らは普通科(ぼくら)をどう見ているのだろうか。
有象無象とでも思っているのだろうか。
それなら――都合がいい。そういった隙があれば仕事が楽になる。
さて、どうしようかと次の種目を考えていると――。
「やあ、君たち普通科だろう？　よくここまで残れたね」
異質な雰囲気を放っている僕らに話しかける者が現れた。
「僕は物間寧人。B組……つまり、ヒーロー科さ。で、要件なんだけど、――僕と組まないかい？」
爽やかな印象ではあるが、どこか人を苛立たせるような立ち振る舞いを見せる彼は、自身を物間と名乗った。
内容をまとめると、彼は目立ってばかりのA組を憎んでいるらしく、彼らを蹴落とすために一時的にチームを組まないかというものだった。
なるほどなるほど。
「遠慮しておくよ」
僕はそう言った。
「へえ……どうしてかな？」

「僕らはそんなことせずとも勝てるからだよ。ねえ心操くん」
「あ、ああ……」
「それに――君と組んでも勝つ未来が見えないな」
彼は自分の策を過信するタイプに見える。計画はいいが、失敗した時のことを甘く見ているタイプだ。
だから失敗したらたちまち破綻。そして僕らもそれに巻き込まれてしまうだろう。
なら組む必要はない。
それに――何でも自分の思い通りにいくと思っているやつの鼻を叩き折る方が僕は好きだ。
僕がスケアクロウを信じているのは彼が負ける姿が見えないからであって、彼からは負ける気配しか感じられない。
なら、組む必要はない。それだけだ。
「なるほど――交渉決裂だ。後で後悔しないようにね、普通科のお二人さん」
じゃ、と彼は立ち去った。
ヒーロー科にもこういう性格の人がいるんだなぁと興味を持ちつつ、僕は第二種目を見る。
第二種目は騎馬戦。四人一組で先ほどのハチマキを取り合うというシンプルなもの。

ただ、ハチマキの得点は先ほどのレースが関わってくる。
上位のハチマキであればあるほど得点は高くなる。そして一位は一千万ポイント。
つまり、一位のハチマキを手に入れた者は勝ちが確定する。
これはチーム選びが重要そうだ。
心操も同じことを考えているらしく、辺りを見回し、唸っている。
そう、相手は身内だらけに対し、僕らは二人しかいないという状況で四人のチームを作るのは困難だ。
なので僕は彼にアドバイスする。
「二人ほど洗脳して仲間に入れよう」
「それしか……ないか」
「不安なのかい心操くん。大丈夫だよ。勝てばいいんだ。勝てば彼らだって次に進める。問題ないだろう？」
「ああ……」
「じゃあ作戦通り行こう」
——僕を洗脳してくれ。
薄れていく意識の中、僕の目には不安と決意が混ざり合い、複雑な表情をしている心操の姿が映っていた。

5、個性…××

――人は生まれながらにして不平等だ。

希少な個性を持ち、裕福な家庭に生まれた彼、〝付与川癒士〟は燃え行く自身の家を見ながらそう思った。

◆

付与川家は有名な治癒の個性を持った医者の家系である。

治癒系の個性は貴重であるため、個性婚は当たり前で生まれた時から許嫁がいる。

個性婚は基本的に認められていないが、治癒系個性は貴重であるため、政府から黙認されているのが現状である。

彼はその付与川でも珍しく、〝一度触れたもの〟を治すことが出来る個性である。

ただ、使用するたびに倒れたり、血を吐いたりするといった症状が多く見られるため、彼は問題児として一日のほとんどを個性の練習に費やされるのだった。

けれども、彼は使用後何らかの症状を引き起こし、親は失敗作だと認識し、そこから彼以外の兄妹を可愛がるようになった。
我が子として接するのは外出時のみで、家の中ではひたすら除け者扱い。無能のレッテルを貼り、兄弟たちの雑用を課した。が、彼はひたすら親の期待に応えようと個性の修行を怠ることなく、日々努力していた。
そんな時だった。
彼の人生を大きく変える出会いは、彼の身体が限界に達していたそんな時だった。
その日は授業参観で、偶々母親と共に外出していた。
会話は一つも無かったがそれでも彼は幸せだった。
そんな幸せが、その出会いによって大きく変貌する。
それは彼が偶々母親と外出している時だった。
彼らは授業参観の帰りで、母親は外面を気にして彼にとやかく言わず、ただただ普通の親子のように接していた。その時だけが彼の心の癒しだった。
そんな彼らの前に現れたのは――ヒーローとヴィランだった。
ヴィランはヒーローに捕獲され、そのまま警察に突き出される。そんな時――。
彼はヴィランに近づき、個性を使用した。
そして彼は自身の中の何かが彼に流れていくのを感じながらも、彼のダメージが回復

するのを喜んだ。
げほっ、と彼は吐血するもそれが心地よかった。
誰かのためになれる。それだけが心の支えで、両親から褒められる、存在を認めてもらえる瞬間だったから、彼は好きだった。
が、その時は違った。
ぱん、と乾いた音が響く。
頬から伝わる鈍い痛みに彼は自分が母親に叩かれだと認識した。
母親は鬼のような血相で彼を叱る。
どうしてヴィランの怪我を治したのか。まだ自分の能力を使いこなしていないのか。
付与川の人間として最低だ。顔も見たくない。
憤怒の表情で罵る母親に、彼は首を傾げた。
――どうしてヴィランだったら治療したら駄目なの？
その言葉を発した後の記憶を、彼は覚えていない。
気が付けば自宅におり、親は完全に彼をいないものとして扱った。
少しずつ彼の価値観は狂い始め――人生がおかしな方向へと進み始める。
彼の居場所はどこにもなかった。
ただ、家に帰りたくないと公園で時間を潰すようになった。

そんな時、彼は最悪な男と出会ってしまった。
「やあ、こんな時間にどうしたんだい？」
その男は〝知原幻覚（ちはらげんかく）〟という医者だった。
彼の個性は『フラッシュバック』と言い、トラウマを何度も脳内で再生できるという個性で、その能力を応用して、人のトラウマを見るのが趣味だった。
人が恐怖する姿を見るのがたまらく好きで、医者になったのも死に恐怖を覚える人の顔が見たいからという私欲に塗れた理由の、どうしようもない最低な男だった。
そんな彼は癒士という少年を見て、ほう、と思わず声を漏らす。
癒士のトラウマは見れなかったのである。
理由は単純だ。彼は人生で一度も恐怖したことがないからである。
まず、恐怖がなんなのわかっていないようだ。
面白い、と知原は思った。
どうすれば彼は恐怖という感情を覚えるのだろう。と、自分の個性への理解と、彼の人生への興味により、知原は彼を育てることにした。
「なるほど、家に帰りたくないのか」
ふむふむ、と彼は頷くと閃いたとばかりに目を輝かせる。
「――なら燃やそう。そんな家なんて必要ない。私が新しい家を用意しようではない

か」

彼に出会ったことが癒士の失敗であり、彼がヴィランとして生きる切っ掛けとなった。

そして彼は自身を〝厭士〟と名乗り、雄英に入る際、付与川と言う名も捨てた。

彼はまだ真に恐怖していない。恐怖というものが未だにわからず、ただただ探している。

壊れてしまった自分が見つかる気がして、ただただ彼はトラウマを探している。

◆

薄れゆく意識の中、走馬燈のように自分の過去が流れ出す。

どこで道を踏み外してしまったのだろう。どこから僕はこうなってしまったのだろう。

純粋な疑問が頭に浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返す。

人は誰だって何かに怯えている。

それを見るのがスケアクロウの趣味であり、個性だ。

なのに僕は何にも覚えていないという。

どうしてだろう。家に帰りたくないというのは怯えていたからではないのだろうか。
そう言い聞かせてきたが、スケアクロウは僕のトラウマを見ることが出来なかった。
もしかすると、僕は怯えていなかったのかもしれない。
あの時僕が抱いて感情はもしかすると、恐怖ではなく――。
――怒りだったのかもしれない。
その時、ふと誰かが僕にぶつかったらしく洗脳が解けた。
「――――」
湧き上がる感情に自分が抑えられなくなる。
僕は思わず〝手〟を伸ばした。
何かに縋るよう、その〝大量〟の手を伸ばす。
そして僕に注がれるのは、彼らの〝生命エネルギー〟だった。
――人間が生きるために必要な栄養分、傷が出来た際の再生能力。
そういった生命が生きるために必要なエネルギー、言うなれば生命力。
僕はそれらを〝吸収〟し、傷ついた何かの代わりに負担させることが出来る。
全て肩代わりさせるのは僕か他人だ。傷ついた者はただ回復するだけ。
なんて不平等なんだろう。選ばれた者以外回復出来ないだなんて、最低だ。
でも、仕方ない。だって世界は不平等なのだから。しょうがないのだ。

……ただ、今回はイレギュラーだった。
まさか僕の個性が肉体面のダメージだけではなく、精神面にも使用出来るとは――。
可能性が広がったのは嬉しいが。
今ので使用した人数は十五。全員見学と化していた普通科で代用したが、下手すればばれてしまう。
……まずったなぁ。
僕の個性はダメージが大きければ大きいほど生命力の吸収量は増える。
つまり、今回のダメージはそれほど大きかったようだ。
何とか分散することでダメージ量自体は少ないが、十五人者の人間が同時に体調不良を訴えたら怪しまれるだろう。……何という失態だ。自分で勝手に思い出して、勝手にダメージを受けて、何やってんだろう。
ただ、非常に爽やかな気分だ。
自分の精神ダメージを彼らが肩代わりしてくれたおかげだろうか、非常に清々しい。
僕は爽やかな笑みを心操に見せる。
心操は唖然とした顔で僕を見ていた。
……失礼なやつだ。

◆

そんなこともありつつ、何とか騎馬戦を終える。
僕らは心操の力もあって三位という中々の好成績で残ることが出来た。
順調な滑り出しである。
そして、次の種目は純粋なトーナメント形式のバトル。
一対一のガチバトルだ。
ならもう後は好き勝手しよう。僕は一回戦の一試合目で少し緊張気味の心操に声をかける。
「心操くん。とうとうここまで来たね。後はもう彼らを倒せば僕らはヒーロー科に編入出来るかもしれないよ。僕は治癒能力だから難しいかもしれないけど、君の個性ならきっと勝ち上がれるよ！　頑張って！」
僕は知っていた。
心操の個性はすでにばれている。
あの尻尾の生えた男は僕と同じように途中で洗脳が解けていた。
つまり、洗脳の解除法を知っている。
後はまあ、洗脳の条件だが……ばれているだろう。シンプルだし。

なので、この勝負は負ける可能性が非常に高い。
いや、ほぼ負けだ。
万が一勝ったとしても次の試合では能力がばれている可能性が高いので彼が勝ち上がるのは非常に困難だ。
けれども僕はそれを言わなかった。
これから勝ちに行こうとする相手にそんなこと言うのは良い行いなのか？
それは違うだろう。何事もモチベーションというのは大事である。
例えそれが負け濃厚な勝負であったとしてもそのモチベーション次第で覆すことが可能なのだ。
だから僕は特にアドバイスせず、彼を応援するだけだ。
それが友人としての正しい行いだろう。
彼の個性は決まれば確実に勝利を得ることができる一撃必殺のような個性だ。
出来ればこういった場で披露せず、別の場所で発揮するのが正しい行いなのでこの場に出るべきではなかったというのが本音である。まあ、僕としては万々歳なのでいいのだが、彼は勢いがあるものの、どこか抜けている部分が多い。だからこそ僕のような者に付け込まれるのだから、気を付けるべきだったと思った。
万が一を信じよう。彼はきっと勝つ。そう、例え相手がヒーロー科であっても彼は勝

ち進むだろう。

◆

心操は負けた。

彼の洗脳は発動したのだが、なぜか相手の洗脳が解け、呆気なく負けた。

まじかよ心操。いやそれでこそ心操と言うべきか。

期待を裏切らない男だ。

何とも都合のいい負け方だ。個性を使用しつつ負けるという理想的な負け方をしてくれたおかげで、やりやすくなった。彼には感謝しかない。

……それにしてもどうして彼は洗脳を解くことが出来たのだろうか。

洗脳された状態で洗脳を解くとは、明らかに異常である。

これはスケアクロウに報告しておいた方がいいだろう。

そう思いつつも、どこかすっきりした顔の心操に声をかける。

「お疲れ心操くん。惜しかったね」

「……惜しくなんかねえよ。単純に俺の力不足だ」

「いやいや、運が悪かっただけだよ。彼が洗脳を自力で解くなんてあり得ないことだし

ね」

「……今回のではっきりわかったんだ。俺は個性に頼りすぎてたってな。フォローありがとよ厭士。俺の分まで頑張ってくれ」

「……」

……これはまずいなぁ。

何が切っ掛けかはわからないが、彼は自分が成長する答えを見つけ始めている。

視野が広がったのだろうか。放っておけばそのままヒーローへの夢を諦めずに終わってしまう。

振り出しに戻ってしまった。

しょうがない。

作戦変更だ。少々荒療治だが、仕方ない。

彼の希望を手早く打ち砕こう。今更どうあがいても無駄だということを知らしめよう。

なら頑張らなくちゃだ。と僕は笑う。

次の試合は僕だ。

もう一人の普通科である僕だ。

恐らく彼と同じ実力であると皆は想定する。

それを壊そう。ついでにヒーロー科の株を下げよう。
それが僕の使命で、役目なのだから仕方ない。
可哀想だけど僕が印象最悪にしてあげよう。
内定先がないのなら僕が紹介しよう。
世間様に迷惑をかける簡単なお仕事だ。
――面白いだろう？　僕は怪我をした心操を治しつつ会場へと向かった。

6、暴力の伝え方

結局は力だ。
相手を認めさせるには力が必要だ。
だからヒーローにおいて必要なものは正義心ではなく、強さであると僕は考える。
自分を守れない者が他人を守れるわけがない。
どれだけ綺麗ごとを言っても結局は力に頼らざるを得ないのだ。
つまりは、個性の強さ、有無によって大きな格差が生まれる。
いかに正義の美学を語ろうとも、その結論には変わりない。
持たざる者はどうすればいいのか。ヒーローになる資格はないのか。
そんな疑問にいくつ返答があろうと、結論は変わらない。
そして見て見ぬふりを続ける。誰にでも慣れたらヒーローなんて必要ないのだと言い訳し、嫌なものから逃げて逃げて、人々から感謝される甘い話に食いついて。
なんということだ。ヴィランより悪いじゃないか。
最高だ。世の中皆悪人だらけ、不平等。

でもそんな不平等な人にも手を差し伸べるのがヴィランだ。
どん底で、上を見上げ続けるより、傷を舐め合いながら勝ち組の足を引っ張ろう。
退屈な人生を、華やかに。

◆

僕はヒーローになりたかったのかもしれない。
嘘だ。どうして僕があんな不自由な職に就かなくちゃならないんだ。
どうかしてる。と思いつつも僕はヒーローへの道に近づいていた。
というのも、ヒーローが自分を売り込む場である雄英体育祭のトーナメントまで残ってしまったからである。
スケアクロウの命令であるのだから仕方ないが、ここまで目立っていいものかと思ってしまう。
これだけの人数に僕の個性がばれる危険性がある。
この個性はばれてもそこそこ強いのだが、弱点さえわかれば簡単に対処されてしまう。
なのであまりばれたくはないのだ。

――僕の個性は『回復』ということになっている。
知原厭士は回復、自分か相手を回復させる。そして過剰に回復させると体力を削ることが出来るという能力になっている。
まあ、殆ど近いし、答えのようなものだ。
ただ、根本的な部分、弱点は隠しているので個性は使い放題だ。
けれども、〝体力を削る程度〟で抑えなければならないというのは中々難しい。
どれだけの人に被害が及ぶのだろうか。こんな力比べのために、何人の犠牲者が生まれるのだろうか。
馬鹿馬鹿しくて笑ってしまう。いつだって不平等だ。けれども仕方ない。
いつだってヒーローには犠牲が付き物だから、しょうがない。
『さあさあ次の試合を紹介するぜ！　まずはヒーロー科、芦戸三奈!!』
ピンクの肌で黒い目の少女、芦戸がプレゼント・マイクの実況に応えるよう観客席に手を振る。
彼女は確か、酸を使う個性だった筈だ。僕の〝おともだち〟が先日調べた情報なので確証はないが、おともだちなので信じよう。
人格は個性に現れる理論でいくと、過激で凶悪な一面があるというのが予想だが、彼女の雰囲気からしてそのような凶悪さは感じられない。

なるほど。環境が良かったのか。
幸せ者なのだろう。とても元気があって、暗い部分が見えない愛らしい少女だ。
けれど、その個性はヒーローよりもヴィラン向けではないか？
人を簡単に殺めてしまいそうな個性だ。
ヒーローとするからには相手にぶちまけるといった危険な真似は出来ない。
勿体ない。その個性は他人に迷惑をかけるのに持って来いの個性なのに、勿体ない。
個性の無駄遣いだ。
『そしてまさかの二人目の普通科！　知原厭士！』
当然ながら期待なんてされていないので観客の反応は良くない。
それでいい。別にヒーローに憧れてはいないのだから。
「正々堂々、いい勝負をしよう」
そう言って僕は彼女に手を差し出す。
「うん！　お互い頑張ろうね！」
彼女はそう返しつつ、僕の手を握る。
なんて明るくて元気な子なのだろう。こういった子はどこでも有利で、人生が上手くいくんだろうな。
元気な子は好きだ。幸せな子を見るのが好きだ。

でもそういう子が普段しない顔を見るのはもっと好きだ。
「普通科だからって手加減はしないよ！」
「ははは っ、出来ればハンデとか欲しいんだけどね」
彼女は自身の腕から酸を出し、僕の足を止めるよう当たる寸前で酸の塊を投げる。
酸はジュ、と床を溶かす。
なるほど、強力な個性だ。
威力は申し分ない。万が一、万が一だが人に当たると大変なことになってしまうだろう。
まあ、彼女も使い慣れているからギリギリ当たらないラインを把握しており、相手もその酸に怯えて動けないという前提の攻撃をしてくる。その隙を付いて体術やら何やらで相手を場外にでも出すのだろうか。
勿体ない。決定力のある個性を持ちながら使わないなんて勿体ない。
心操も欲しいが彼女の個性も欲しい。
けれども、ヒーロー科に所属するような正義感が強すぎる者はヴィランという名前を出しただけで即アウトだ。
すぐさま暴力で解決してしまうだろう。
ああ、欲しいなその個性。

必要な破壊力だ。
この個性を手に入れられないなんて、悲しい話だ。
だから迷惑をかけよう。そう思った。
「ほらほら！　動くと当たっちゃうよ！」
そう言って彼女は酸を投げる。
彼女は僕を心操と同じ、決まると強い一撃必殺的な個性だと踏んで近寄らせないようにしているのだろう。
間違っていない。彼女の推測は正しい。優秀だ。
しかし、彼女は正々堂々の精神で失敗してしまった。
それと、自身の攻撃は当たらないという前提で放っていることが失敗だ。
「――っぐ」
僕は彼女の言葉を聞く前にすでに前に踏み込んでいた。
当然、彼女は動かないものであると考えていたため、僕に当たらないよう調整したいのだが。
それらは全て、僕に被弾する。
「――っ、がっ……！　うぐ……」
酸に近寄らせないよう威力も上げていたのだろう。威力を上げ、床に落ちた酸を見て

相手は戦意喪失するに違いないとでも考えていたのだろう。
それが仇となった。
強酸は僕の肌を焼く。鋭い痛みと異常なまでに感じる熱さに僕は悶え苦しむ。
「――えっ」
芦戸は素っ頓狂な顔で僕を見ていた。
現状が把握できてないようだ。酷い話だ。僕はこうやって彼女の個性に苦しめられているのに、他人事みたいだね芦戸ちゃん。可愛いなぁ。
「嘘……！　どうして……！」
「き、君は悪くないよ……ぐぅ……僕が勝手に飛び出したから……僕が悪いんだ……」
「――――」
下手な芝居も状況次第ではお涙頂戴の劇になる。
本当にダメージを受けているからこそ人々に大きく印象を与えることが出来る。
芦戸って子の個性は――危険だ。
観客席からもちらほら芦戸の危険性や個性の暴力性についての声が聞こえる。
が、彼女はそれよりも僕を傷つけた方がショックだったようで、声も出ないと言わんばかりの素振りを見せ、わなわなと震えている。
可哀想に……。あれだけ元気一杯だった彼女がどうしてこんな目に合っているんだ。

ああ、僕のせいか。いやでも傷つけたのは君のせいだ。
なら両成敗ってことでお互い悪いことにしよう。
ヒーローとヴィラン、どっちもどっちで決着をつけよう。
「だから――しょうがない」
彼女の袖の中で、僕の〝手〟が伸びる。
完全に戦意喪失した彼女から僕のダメージ分の生命エネルギーを吸収する。
一気に吸うとばれてしまうので、ゆっくりゆっくりと、じわじわ奪っていく。
精神的なショックが原因だと思うように、ゆっくりとゆっくりと。
そして彼女はゆっくりとその場で倒れ伏した。
すかさず僕は彼女の元に近づくと彼女を回復させる。
僕は叫ぶ。救護班を呼び、彼女に謝りながらその場で彼女に声をかけ続ける。
簡単な悲劇の出来上がりだ。
自分の個性の凶悪さを知らなかった少女と、被害者で偶々回復持ちの個性だった少年。
疑おうにもこちらはこちらは一切手を出していない。実際には手を出したが、彼らには僕が何もしていないようにしか見えない筈だ。
僕がそう立ち回ったと批判しても問題ない。

そうすればわざわざ威力を上げた彼女も批判することになるのだ。
どうなっても彼女の株は下がる。
あーあ、ヒーローへの道が遠ざかってしまった。
可哀想に。
けど、僕も半数以上に嫌われるのだから平等だ。
お互い、嫌われながら生きていこうな。
まあでも安心してほしい。
君がヒーローになれなかった時は僕を頼ってほしい。
君にぴったりの職業があるんだ。
ヴィランって言うんだけどね。
ははは。馬鹿みたい。

◆

「と言うわけで奇しくも一回戦勝ちましたよ」
『ああ、テレビで見てたよ。君の演技は下手だったけど、彼女の演技はとても良かった。
そう、初めて親に殴られた少女のような、あり得ないという表情が実に良かった』

「悪趣味ですね」
『悪趣味は君の方だろう？　いたいけな少女を悪者に仕立て上げて、それを庇うように振舞い、全国に配信って君は悪魔か何かい？』
「まあ、ヴィランですし」
『……そういえばそうだったね！』
ははは、と電話越しのスケアクロウと笑い声がはもる。
あれから試合は一時中断、テレビも内容が内容から放送を一時中止しているようだ。
芦戸は精神的ショックによる疲労として扱われ、今は保健室でリカバリーガールが看病している。
彼女はもう回復させた。だから彼女が倒れた本当の理由は誰にもわからない。
彼女には酷いことをした。
僕はその能力の危険な部分を身体で証明しただけなのに、彼女が自身の個性を把握していないと普通科の皆は憤怒していた。
そんなわけないだろう。一番その個性の危険さをわかっていたのは彼女だ。
ただ、皆が避けてくれるからという考えのまま使ってしまったのが悪かっただけで、彼女は悪くない。
だから僕だけでも彼女の味方になろうと思う。

彼女は差し出した僕の手を握るほどの優しい人物だ。
被害者だろうが関係ない。僕は彼女の味方をしよう。もしかしたら僕の思い通りにいくかもしれない。
いやあ、悪いなぁ、と思いつつもこれがお仕事だから恨むならスケアクロウを恨んでほしい。
最低だなスケアクロウ。最低だ。
『じゃあもう後はどうでもいいから、好きな時に負けなさい』
「わかりました。次の試合で負けます」
ぶつん、と通話が終わると、僕はテレビをつける。
一年のトーナメントを放送していた番組は一時的に中断され、それを誤魔化すかの如く、ニュースが放送されていた。
『先日、またもヒーロー殺しが現れました――』
ヒーロー殺しか。
それってただのヴィランじゃないのかと思ったが、どうやら違うらしい。
彼は彼の基準でヒーローの名を汚すと判断したものを攻撃しているらしい。
そして彼はヒーローだけではなく、凶悪犯を多く攻撃しているようだ。
なので彼が現れた街の治安が良くなるという現象も起きているようである。

人を殺して得る平穏は幸せかはたまた不幸か。
僕はどちらでもいいけれど、こういった思想を持つ人とは関わりたくない。
頭空っぽなやつが好きなんだ。何も考えてなくて、脳と行動が直結してるようなやつが好きなんだ。
だから変な思想を持っているであろう彼とは仲良くなれそうにない。
僕には正義や悪なんてどうでもいいのだ。
どうでもいいことして、馬鹿馬鹿しく笑って。
最後は人様に迷惑がかかるような、華やかな死に方がしたい。
くたばってしまえ。
けれどもまだ、もう少しだけ自分の欲望通りに動こう。
それがヴィランだけが得られる、自由なのだから。

7、失敗

この世界は酷く不自由だ。
個性を悪用する者のためにヒーローは個性を使用できるが、それ以外の者は使用することを禁じられている。
つまり、ヒーロー以外凶暴なヴィランを捕獲する手立てはない。
個性を尊重するというのに個性の使用を禁じてしまうのだ。
個性の誕生により今まで保たれてきた規律が崩壊してしまったのである。
この個性の使用も規律を守るために作られたもののようだが、それが隙と化している。
誤魔化すようにヒーローを大量に増やしているが、完全にヴィランが生まれる前提、そしてヒーローに頼る前提というのは中々の賭けではないかと思う。
それこそ平和の象徴たるオールマイトが折れた時、どうなるのだろう。
持ち上げられた者が落ちた時が一番恐ろしい。
スケアクロウはオールマイトが近々消えるだろうと考えていた。
彼に頼りすぎたツケを返す時は近いのかもしれない。

◆

人間、誰しも敵に回したくない者がいる。
僕の場合、スケアクロウという男がそうだ。
彼は純粋な悪人だ。
悲しい過去も大きな切っ掛けもない。ただただ趣味が高じてヴィランになった男だ。
なのでヒーローへの恨みもなければヴィランへの思い入れもない。
どこにでもいる一般人のような男だ。
だからヒーローへの恨みもないので一般人を中心に狙ったり、ヒーローへ協力したりする。
そして自分に都合が悪ければ同じヴィランであろうとも潰したりする。
そんな彼はろくでもないことばかり考える。
先日は自分が使えないと思ったヴィラン、邪魔なヴィランをこれといってぱっとしないヒーローに掴まえさせ、その際に貰う懸賞金の何割かを貰うというマッチポンプを行っていた。
ヒーローは大量にいる。が、その中でも活躍し、満足な給料を得れるのはほんの一握

りだ。

公務員ではあるものの、歩合制であるため、ぱっとしないヒーローの給料はその仕事に見合っていない額になる。そういう者は大体サイドキックになるのが主流であるが、サイドキックに戻ることも出来ず、引退するしか道が残されていない者も少なからずいるのが現実だ。

スケアクロウはそういった後がない者に適当なヴィランを与え、満足いく収入が得られるようにした。

そして自分も上手い具合に処分、一定額の金が手に入るのでお互いに良いこと尽くしという平和なビジネスを行っていた。

が、当然彼の目的はそんな金稼ぎではなく、憧れでヒーローになったのにヴィランに利用されているという現状に絶望しながらも生活が豊かになっていくという事実を知るヒーローの顔が見たいというものだった。

なのでスケアクロウは出来る限りヒーローへの願望が強い者を中心に選んでいた。

当然、彼を裏切る者は出てくる。が、そういった者も上手く利用した。

『今日は不幸な日だ。私の友人である彼がどうやら事故に巻き込まれたらしいんだ。そう、彼はヒーローという職業でね、君のように僕に協力してくれた男なんだが……即死だったようでね、私も最善は尽くしたが、駄目だった。しかし――』

そう言って彼は集めたヒーローたちの前にその包みを置いた。
『何とかそれだけは持って帰ることが出来た』
ごとり、と置かれたその包みはちょうどサッカーボールぐらいのサイズだろうか、にしては中々の重量感があり、そして包みの底が赤く染まっている。
そして自然に包みが開けられ、辺りは恐怖に包まれる。
『暴力は嫌いだ。――けれど、好き嫌いは良くない。大人なんだから、好き嫌いは無くさないといけない』
――君たちもそう思うだろう？
その時のスケアクロウの顔はとても満足気で、幸せに満ちていた。
僕は彼に恐怖を抱いていたのだろうか。彼に逆らいたくないというのは怯えからなのだろうか。
まだわからない。
今はただ、彼に従うだけだ。
それが例え最悪な選択肢だとしても、僕はそれを選ぶことしか出来ない。
指示待ち人間だ。あはは。駄目なやつだな僕は。
ずっと指示を待って楽に生きよう。何かあれば彼のせいにしよう。
誰かに押し付けるのが一番楽なんだ。楽でいいじゃないか。楽して生きよう。

◆

そして第二試合が始まる。

芦戸の傍にいたからわからなかったが、一度会場が崩壊したため、一時的に中断されていたらしい。

恐らく轟の仕業だろう。彼の力ならこれぐらい出来て当然だ。

ただ……彼にこれだけの力を出させた相手は一体……。

確か……緑谷だっけか。彼も後で調べないとな。

『さあて、次の試合は――ヒーロー科、常闇踏陰！　そして対するは――第一試合波乱を巻き起こした男、もう放送事故はやめてくれ！　普通科、知原厭士！』

そんなことを考えながらも、試合が始まる。

僕はよろしく頼むよ、と握手を求める。どうせ消化試合なのだ。僕の株は上げるだけ上げておこう。

彼は何か考える素振りをしながらも僕の握手を返した。

そして、僕にしか聞こえないような声でぼそりと囁く。

「お前――芦戸がああなるよう仕向けたのか――？」

……優秀なの引いちゃったかな。

「やめてくれよ……僕は後悔してるんだ。僕がこんな個性を持たなければ彼女は傷つかなかったのかもしれなかったのに……」

「……その目は真実を語っているように見えない。お前からは何かどす黒いものを感じる。そう、自分の思い通りにいくためにはどんな手段でも使ってやるという、禍々しい意志が――な」

「……酷いなぁ」

鋭いのか、僕が隠し事が下手なのかはわからないが、どうやら彼には僕が彼女をあんな目に合わせたのではないかと疑っているようだ。

酷い話だ。身内びいきか。……いや、彼には見えていたのだろう。僕が故意的に彼女の酸に向かう姿が、見えていたのだろう。そして彼は心操を見て普通科である僕はどんな手段を使っても勝ち上がろうとしてくると考え、僕の様子を探っている。

「僕は純粋に、個性を上手く使っただけだよ常闇くん」

「だからその使い方が――」

「悪かったとでも言いたのかい？　つまり、回復能力の僕は下手な小細工せず、ひっそり自分の怪我だけ治してさっさと負けろとでも？」

「いや……そういうわけではない。ただ、もっと正々堂々と出来ただろう！　――障害

物競走の際、お前の動きを見たが、身体能力は芦戸並にある。そう、もう少しフェアプレーが出来た筈だ！」

「……常闇くん。結構熱血なんだね。尊敬しちゃうよ。……でもさ、ちょっと求めすぎだと思うんだ」

「求めすぎ……だと？」

常闇は少し困惑しながらも僕に聞き返す。

彼は利口すぎる。そして個性も強力だ。

欲しいなぁ。彼のようなお友達がいっぱい欲しい。けれど、今そんな素振りを見せるともっと怪しまれるので隠しつつ、僕は答える。

「君の考えは正しい。皆が皆、正々堂々と戦うのが正しいに決まってる。でもね、それってどうしても不幸になる者が出ると思うんだ。まあ、僕は偶然彼女の攻撃に当たったのだけれど、ここでは僕が故意的に当たったことにしよう。で、そうしなければ僕はどうなっていた？　無様に負けていただろうね。身体能力が五分だとしても彼女の個性が加われば僕なんか一捻りだ。つまり、君の言っていることは真正面からの戦い以外認めないってことだよね？　攻撃に特化した個性以外は下手な小細工せずに負けろってことなんだね。ははは」

随分差別的だね、と僕は笑った。

常闇は何も言わず、ただ俯いていた。
僕の言葉は結局、屁理屈である。
正々堂々戦うことがこのトーナメントのルールであるにも関わらず、故意的にあのような真似をした。
なので彼の言っていることは間違いではない。
しかし、僕が故意的にやったという証拠がない。
いや、実際に彼は見たようだが、それが偶然でない証拠もない。
後は水かけ論だ。やったかやってないか言い合うだけ。
目がどうだの意志がどうだの言っても、僕が彼女の攻撃に当たった理由も明確ではないのでこの言い合いは終わらないのである。
「堂々巡りだね常闇くん。お互いどこかで妥協しないと終わりそうにない」
「……妥協か。すまない。俺の決めつけでこんな事言ってしまって……」
「気にしないでよ。僕も君に酷いことを言ったこの話はこれでおしまいだ」
僕は謝る彼に言葉を返す。
優しいなぁ、常闇くん。
こんな怪しい奴に謝るだなんて、とても心が綺麗だね。
甘いなぁ。差別だろうと何であろうと、とことん僕を怪しめばいいのに。

そんな酸の嵐に突っ込む馬鹿はいないだろと言えばいいのに。
全部わかってて言葉を飲み込んだのだろう。僕を信じて、批難しなかったのだろう。
ああ、どうしよう。負けようと思ったけど――。
彼の負ける姿が見たくなった。
「じゃあ戦おうよ常闇くん。フェアプレイで、お互いの全力を出し合おう」
「――ああ、全力で来い」
常闇は自身の個性『黒影（ダークシャドウ）』を出す。
彼の個性は伸縮自在の影のようなモンスターに指示を出し、戦わせることが出来るという珍しい個性だ。
「黒影――奴とは一定の距離を取る。俺に近づけないよう攻撃しろ」
『アイヨー!』
そう言って常闇は離れ、黒影は僕を場外へ出そうとその大きな手を伸ばす。
僕は後ろに下がり攻撃を避け、そのまま彼に近づこうとするが、黒影は彼の邪魔をする。
彼はまだ僕の個性を把握していないようだ。
先ほど芦戸に見せたように回復の個性であるとは理解しているが、万が一のことを思い、一定の距離を置きつつ、そのまま黒影で場外に出そうと考えているようである。

「凄いね君の個性。僕の個性と違って戦闘向きだ」
スケアクロウに戦闘系の個性のヴィランと戦わされることがよく合ったが、その中でも優れた個性である。
自分と一定の距離で戦わせることが出来るという点も非常にいい。
ただ、何かしらの弱点があるだろう。別に今は見極めなくてもいいが、弱点があるのであればそれも見てみたい。
そして黒影の手が僕の頬を掠める。
傷口からだらり、と血が流れ、ぽたりと床に落ちた。
「それに中々の威力だ。流石ヒーロー科。優れた個性の人がいっぱいいるね」
僕は彼に見せつけるよう頬の傷を治す。
治すほどの怪我ではないが、彼が望むよう治癒系の個性であるというのを理解させる。
「やはり治癒系の個性か……」
「安心した？　僕が攻撃出来ない個性だから、安心した？」
「……」
「別に悪いことではないと思うよ。個性なんて人それぞれだし、今は勝つための勝負だ。相手への同情は二の次だぜ常闇くん」

どこか不安気な彼に僕は彼が欲しがっている言葉を投げかける。
今頃彼は自分が言った言葉を後悔しているのだろう。
本当に回復することしか出来ない個性の持ち主に、正々堂々戦えだの言った自分を強く非難しているのだろう。
優しいなぁ、常闇くん。
とっても正義感が強くて、ヒーローらしいや。
「手加減なんていらないよ。本気で来てくれ、常闇くん」
「――黒影」
そして黒影が僕に攻撃を仕掛ける。が、僕は場外に出ないよう粘る。
避ける暇さえ与えないような追撃に僕はただただ耐えることしか出来ない。
常闇は早く終わらせようと僕が場外に出るような攻撃をするが、僕はその攻撃に抗うよう耐える。
ダメージは蓄積されていく。少しずつ少しずつ僕は後退していく。
「そう、加減なんていらない。――僕も手加減しないから」
刹那、常闇は崩れ落ちるように床に倒れた。
「な……にっ……」
常闇は必死に身体を動かそうとするが思い通りに動かないらしく、寝そべったまま指

先一つ動かせないでいた。
黒影も連動しているようで、彼が倒れた途端、黒影は消えた。
「僕の個性は『回復』。僕は君を回復させたんだ。無傷な君を回復させ、無駄に体力を使わせた。少しずつ少しずつ気づかれないように、君から体力を奪った。体力切れだよ」
と、嘘を吐く。
本当は僕の身体を少しずつ回復させ、彼からゆっくり生命エネルギーを奪っていただけなのだが、設定上そういう個性にしているので適当にそれっぽい嘘を吐いた。
まあ、八割方合っているのだから嘘ではない。
「疲れただろう？　こういう個性だからね、あまり使いたくなかったんだよ」
「……なるほど、な。……この勝負……俺の、負け……だ」
と、彼は最後の力を振り絞り、そう言った。
……勝ってしまった。あーあ、負ける予定だったのに。
でも彼の満足気に、僕を信じて負けた姿を見るのは中々良かった。
これで彼からの信頼も得ただろう。自分の個性に苦悩している少年だと、思っただろう。
もしかすると、任務を大きく変えるべきなのかもしれない。
普通科だけではなく、ヒーロー科からもヴィランに引き込めるかもしれない。

もっともっと、友達が増やせるかもしれない。
なら目立った方がいいだろう。目立った方が引き込みやすい。
心操のように、ヒーロー科に憧れていた少年を演じよう。
そうすればきっと――。
明るい未来が待ってる筈だ。
僕は倒れた彼を運びながら心の中で笑っていた。

8、どうせなら君のようになりたかった

個性は両親から引き継がれる。
炎を使う父親と氷を使う母親の子供が炎、氷の両方を使用することが出来るようになる。
当然、必ずではないが、その特徴を上手く生かすことによって理想の個性を生み出すことが出来る。
付与川家は国から認められた治癒個性の家系だった。
治癒個性は貴重で、現代医学では到底不可能な治療を数秒で治すことも可能である。
ヴィランが蔓延るこの世界では回復個性は必須レベルだ。
故に、付与川家は個性による結婚が認められている貴重な例だった。
結婚相手はすでに決まっており、理想の個性が生まれるまで子供を作らされ、そしてその子もまた結婚相手が決まっており、理想の個性が生まれるまで子供を作らされる。
そうして冷め切った家庭と積み重なった負の感情により、イレギュラーが生まれた。
付与川の人間が持つ病院は一流のヒーローや選ばれし上流国民のみが使用出来るも

のだ。
そのせいか少しずつ価値観が変わっていた。
回復すべき者とそうでない者がいる。そういった差別的な価値観。
それらの負債を全て抱えたのが彼、付与川癒士だった。
蓄積された付与川の負の部分。不平等な価値観。そういったものを押し付けられ、そしてそれがスケアクロウによって全てが台無しになった。
彼は全てを失った。
けれども彼はどこか憑き物が落ちたような顔をしていた。

◆

人を傷つけるのは嫌いだ。
自らの手で人に危害を加えるのは気分が悪くて仕方ない。
他人に嫌われるのは嫌だ。
誰にも嫌われず、ただただ褒められたかった。
だから好かれようと必死で、いつだって媚を売っていた。
周りの目を気にしては好かれようとにこにこと媚びへつらい、他人の嫌がることは全

部やった。
やりたがらないことをすると皆喜ぶ。そして褒められる。
だから全部やった。
そして気づけばそれが当たり前になり、負債だけが手元に残った。
そんな中学生活を送り、気づけば友人の数も少なかったなぁ、と思いつつ僕に対峙する彼を見る。
友達と言える友達がトガちゃんしかいない。何ともまあ寂しい学生生活を送ってきたことか。
「君は恵まれているね。爆豪くん」
「ああん？　何言ってんだ糞モブ」
「そう、それ。そうやって暴言を吐いても君は咎められない環境にいたんだね。だからいくら悪態を付いても暴言を吐いても周りは止めやしない。君が強いから」
「……」
「でもそれってさ、ヒーローらしくないよね。どちらかと言えば――」
――ヴィランだよね。
僕は彼が一番言われたくない言葉を、吐いた。

◆

準決勝の相手は爆豪という少年だった。

彼はヒーロー科でも目立った存在で、その『爆破』という強力な個性を生かし、成績はトップクラス。今大会の優勝候補だった。

ただ、その性格に問題があり、極めて凶暴、凶悪。発言が過激で普通科からもその行動によって嫌われている。

僕の個性でこれ以上勝ち上がるのは無理なのですぐにでも場外に出ようと思っていたのだが、このような面白そうな人物を煽らずに負けるのは勿体ない。普通科の期待に応えるためにもここはこの行動がベストだろう。

なので煽る。

「君の行動はどちらかと言えばヴィランだ。ヒーローは人を助け、時にはヴィランでさえ助けるものだけど、君からそういった正義心が感じられない。全て力でねじ伏せて終わり。行動も褒められたものではないし、どうしてヒーローを目指そうと思ったのかわからないや。……ああ、収入かな。プロヒーローだと高額だしね。それなら納得だ。でもさ、万が一ヴィランがいなくなった時、ヒーローは廃止されると思うから辞めておいた方がいいよ。君のような賢い人はもっと別の職種を選ぶべきだと思うんだ」

「――――」

ぺらぺらと適当な言葉を吐くと、彼から怒りと殺気が混ざったような何かが伝わる。

口から言葉にならないような言葉が聞こえだし、そろそろかなーと思いつつ、僕は身構える。

「僕の個性は戦いに向いてないからヒーローには厳しいかもしれないね。あーあ、どうせなら君のようになりたかった。……ああ、それでもヒーローは厳しいか。ヴィランになってしまう」

まあ、すでに僕はヴィランなのだけれども。

ははは。

と、ジョークを言っていると、爆発寸前と言わんばかりの形相で彼は俺を睨んでいた。

「遺言はそれでいいのか糞モブ野郎……！」

「そのセリフも、ヴィランっぽいね」

ははは、と僕は場を和ませようと笑う。

刹那、爆破により加速してきた彼が飛び掛かってきた。

とりあえずと言わんばかりに僕はその攻撃を左腕に受ける。

加減はしているのかダメージはそこまでない。それでも爆破という個性は強力で、少しの衝撃と腕に火傷のダメージを負う。

「……強力な個性だ。僕じゃ勝てっこない」
そう言って僕はストックしていた観客に手を伸ばす。
僕の火傷は無くなり、その観客に負担が行く。
人生は負債の押し付け合いだ。誰かが貧乏くじを引く。押し付け合った先にあるのは破滅。最後に笑うのは押し付けて逃げた者だけ。なんて酷い話なんだ。
「……てめえの個性も強力じゃねえかよ糞が」
爆豪はけっ、と悪態を付きながら汗を拭う。
治癒系の個性、そして完璧に把握していないという状況は彼にとって面倒極まりないだろう。
まあ、あの数回だけで僕の個性を把握されても困るが。
「――お前の個性、回復だけじゃねえだろ」
……まじかよ。
頭が回るやつは、面倒だ。
ばれても問題はない。が、単純に賢い奴は嫌いだ。
賢い奴は最後に全てを押し付ける。選ばれた人間だ。
選ばれたやつは、嫌いだ。
「……僕の個性は『回復』だよ。僕は誰かを癒すために生まれてきたんだ」

「馬鹿か。回復だけの奴がここまで上がってこれるかよ。常闇は俺が見た限り少しはやる奴だ。それに勝ったお前が回復以外に芸がないわけねぇだろこの嘘つき野郎」
「そう、だから僕は彼を回復させた。過剰回復ってやつさ」
「それも嘘だ。俺が知ってる限り、治癒系の個性は無傷の者を治せない。それが治癒系におけるデメリットだ。つまり、だ。お前の個性は回復なんかじゃねえ。……何か隠してんだろ、知原」
「――――」
スケアクロウは僕の個性情報に、罠を仕掛けた。
治癒系個性は傷がない者を癒せない。そのことに気付いた者は危険だが、こちらに必要な人材であることは確かである。治癒個性という少ない個性の情報も頭に入っている者、そういった者が欲しい。
そう、彼は必要な人材だ。スケアクロウはどんな手を使ってでも彼を手に入れるだろう。
ならちょっとぐらい大丈夫か。もう見つけただけで僕の仕事は終わりだ。
ここで雄英を辞めても、文句は言われないだろう。
「とっておきは隠すものさ。君だってとっておきは隠してるだろう、爆豪くん」
「当たり前だカス。お前みたいなモブキャラに使うわけねえ、決勝でのとっておきだ」

「ははは」

――くたばってしまえ。

僕は会場にいる〝傷ついている者〟に個性を使用する。

ダメージを負っている普通科からヒーロー科、ストックに使えなかった傷ついている者のダメージを、癒す。

そして僕にその負担が押し付けられる。

僕が怪我人を増やしたから保健室から溢れた軽傷の者が複数会場にいる。

それと、偶々触れていたヒーロー科の緑谷もそこにいたので癒しておく。

僕は癒す個性だ。だから癒す。全て治す。それが僕だ。

そしてその負債を、ダメージを、全て僕が請け負った。

魂が抜けるような、酷く気持ち悪い感覚に襲われる。

くたばりそうだ。手に力が入らない。

生命力が減る。要するに死に近づくということだ。

その感覚はこの世のどれよりも、最悪だろう。

なので押し付けることにした。

「全部あげるよ。爆豪くん」

僕はその奪われた生命エネルギーを補うべく、爆豪の生命エネルギーを――奪う。

「がっ……!?」
「――見せてくれよ。君の限界を。こんなところでくたばるような奴じゃないだろう？」
先ほど僕が経験した最悪な気分を押し付けた。
だらり、と鼻血が流れ、彼は吐血する。
そして身体はガタガタと震えていた。
何度かそれを味わった僕とは違い、彼は始めてだ。彼はこの死に近い感覚に、恐怖に耐えられるだろうか。
スケアクロウが欲したその恐怖の押し付けを、彼は耐えられるだろうか。
云わば試験だ。ヴィラン認定試験。合格すれば素晴らしいヴィランになれる。
素晴らしいヴィランってなんだろうね。ははは。
でも現状はヒーローだ。
彼はこの会場中の怪我を全て請け負ったのだ。これをヒーローと言わずして誰がヒーローだ。
素晴らしい正義心だ。彼の生き様はヒーローそのものだ。
「これで平等だ。僕と君、正々堂々戦おう」
「くそっ……！」

僕はそのまま彼に勝負を挑む。目に見えて彼の動きが悪くなっており、爆破しようにも威力の調整が上手くいかず、衝撃に耐えきれずそのまま背中から倒れる。

そんな彼を僕は見降ろした。

「大丈夫？　調子が悪そうだね。治してあげようか？」

「うるせぇぶっ殺すぞ!!　ぐっ……」

苦しそうに頭を抑える爆豪。

癒しは平等ではない。誰かが救われれば誰かが酷い目に合う。

彼はその不平等の犠牲者だ。可哀想に。

「立ち上がりなよ。君はヒーロー科だ。僕みたいな普通科に負けちゃいけない。困難を乗り越えてこそのヒーローだ。さあ、立てよ」

「……てめえだけはぜってぇぶっ飛ばす……!!」

触れようとした僕の手に触れないよう彼は爆破を使い、後ろに下がりつつ立ち上がった。

僕の個性の条件に予測を付けたのだろう。なるほど、こんな状況でも冷静だ。

ただ個性に頼ってここまで来たのではないことは確かだ。

戦いにおける知識と、状況判断がプロヒーロー並だ。

たちが悪い。

「口だけじゃなくて行動で示してくれよ。爆豪くん」
「……っ!!　死ねや糞モブがぁ!!」
最後の力を振り絞り、彼は全力の爆破を僕にぶつける。
威力を抑え、全力の爆風に僕は飛ばされた。
彼は選んだのだろう。僕を爆破させ倒すのではなく、ルールで勝利することを選んだ。
僕の個性では彼の個性を止めることは出来ない。
呆気なく僕は場外へと飛ばされた。
爆豪の勝利が確定する。
おめでとう。僕は君に勝てずに負けたよ。
君の勝ちだ。呆気ないだろう。僕なんてモブ爆風だけで倒せてしまうのだ。
ははは。
……あーあ。負けちゃった。
とりあえずスケアクロウに報告するか。
彼はヴィランに向いている。あの状況でも頭が回り、戦える時点で彼は非常に優秀だ。
僕は悔しそうに俯く。そして普通科の皆から頑張ったねと祝福され、観客からはまば

らな拍手が送られる。

負けたけれども清々しい。これからのことを考えると笑いが止まらない。

こうして僕の雄英体育祭は、準決勝で終わった。

9、心操は闇の中

何かに偏るよりも、中途半端が一番いい。
何かに特化して、何かが欠けているよりも。何でも出来る完璧よりも。
中途半端だからこそ可能性がある。何にでもなれる。
だから中途半端がいい。中途半端だからこそ希望に満ち溢れ、気が楽になる。
僕は表彰台からその中途半端な表情をした彼を見ていた。

「――――」

心操だ。
彼は表彰台にいる僕を見て、複雑な表情をしていた。
友人である僕が表彰台に立っていて嬉しいという感情と、どうして自分じゃなくて厭士がそこにいるんだという嫉妬の感情。その二つが混ざり合ったような顔をしていた。
友情と妬みを天秤にかけているのだろう。
心のどこかで治癒系の個性では勝ち上がれないと思っていたのだろうか。
僕が謙遜する度に見せるその表情は、ただの見下しだったのではないか。

だから君はそんな表情をしているのではないか。
でもそんな非情にもなりきれないのが心操だ。
なんて面白いんだろう。はっきりお前がなんでそこにいるんだと言えばいいのに。
僕なんかに友情を感じてしまい、本音を噛み殺そうとしている。
普通科からヒーロー科への編入、自分よりも高い順位という自分の将来設計を潰された。
だから彼はこの場で僕を罵っても問題ないだろう。
けれど、そうはしない。彼はとても優しいのだ。
お人よしと言うべきか、彼は完璧な悪人にはなれないようである。
その優しい心はヒーロー向きだ。でも個性はヴィラン向きだ。
素晴らしく中途半端だ。どっちにも向いていて、どちらにもなれないなんて、夢があっていい。
だから僕は彼がやりたかったことをやることにした。
「三位おめでとう知原少年！」
そう言って〝オールマイト〟は僕に銅メダルを授与する。
「ありがとうございます」
僕はそう言葉を返すとオールマイトは少しふむ、と考えるような素振りを見せる。

「君は普通科だったね。ヒーロー志望だったのは担任の先生から聞いているよ。――確かに雄英の試験だとヒーロー科は難しいだろう。しかし、別の学校なら問題なく通っただろうに。どうして普通科に入ったのか、聞いてもいいかな？」

僕はその質問に待っていたと言わんばかりに口元を歪める。

「――僕は雄英のヒーロー科に入りたかったんです。他のヒーロー科じゃ入っても後悔するだろうな、と思っていたので、思い切って編入制度に賭けてみました」

あはは、と頭を掻きつつ少し緊張した素振りを見せる。

堂々とせず、より一般人であればいい。

「それで今回この順位ですが、僕はまだ満足していません。なので――来年は〝ヒーロー科〟で一位を目指します」

そう言って僕はオールマイトに〝手〟を差し出す。

「ナイスハングリー精神！　期待してるよ知原少年！」

オールマイトは差し出された僕の手に応えるよう手を差し出し、握手を交わす。

僕はテレビの前のスケアクロウがにやにやと笑っているのを想像しながらこみ上げる笑いを噛み殺した。

◆

そして表彰が終わり――。

「……」

僕は心操を誘ってマックに来ていた。

「どうしたの心操くん。やっぱり試合の後だから疲れてる？」

「……疲れてねえよ。お前より試合数も少ないしな」

「いやいや、僕もへとへとだよ。自分を回復してやっとってとこさ」

そう返すも彼は僕を信用していないらしく、その目つきの悪い目を僕に向ける。

「……お前、あれだけ戦えるのにどうして黙ってたんだ。俺はお前が……っ……！」

「――無様に負けるとでも思ってたのかい？　で、僕が勝ち進んだから気に食わないと？」

「違っ……！　俺が言いたいのは……！」

「いいんだよ心操くん。勘違いさせた僕が悪いんだ。全部僕が悪いんだ。だから君が不安に思っているであろう嫉妬や妬みじゃないってことは僕もわかってるよ」

「――――」

心操は歯を噛みしめ、その場に俯いた。

「僕も勝てるとは思ってなかったんだ。正直一回戦でもう勝てないと思ってたよ。今回

勝てたのは運だ。だから僕の実力は君より下だ。心操くん」
「……ならあの表彰台での発言はなんだ。お前の言ってることと真逆じゃねえか」
「表彰台だからこその発言だよ。あの場で運が良くて勝ちました～だなんて言ってみなよ。一気にしらけるぜ？　だから普通科を背負った一人の少年の方があの場に適している」
「っ……」
心操は僕の言葉に悔み、不安定な表情を見せる。
僕の発言全てに食いつきそうな勢いだ。やはり彼は悔しかったのだろう。
「どうしたんだい心操くん。君らしくないよ」
僕は彼があの場で言いそうな言葉、行動を選んだ。
もしも彼が三位になったら、どんなことを話してどんな行動を取るのだろう。
そう考えつつ僕は彼がもしも自分があの場にいたらという妄想をしやすいよう行動した。
友人だからこそ、僕は彼の望み通りの行動を取った。
彼の望みを背負った者としては立派に役目を果たせただろう。
「……ごめん」
「謝らなくていいよ。これは僕のせいだからね」

僕を罵っても仕方ない立場にいるのに、心操は僕へ謝罪する。
優しいなぁ心操くんは。だから僕なんかに目を付けられるのだ。
「で、本題なんだけど、今以上に強くなれる方法――知りたくない？」
僕は笑顔でそう言った。

◆

「――とりあえず、作戦は順調です」
「そうか。それは良かった。彼の個性は非常に強力だからね、丁寧に丁寧にこちらへ引きずり込もう」
「……ちなみにですけど、内容を教えてもらってもいいですか？」
「そんな非道なことはしないよ。私が抱えてるヒーローに鍛えてもらって、それが終わったらヒーローが私に使われているという現実でも突きつけるだけさ」
「……」
えげつない。
ヒーローへの願望が強い彼にそれを見せるのは流石の僕でも引く。
その後のケアやらヴィランへの誘導も全て考えているのだろう。

全く、たちが悪いヴィランだ。今の内に警察に突き出すべきなのではないか。
「今回はよく頑張ってくれたね、厭士。流石は私の一番の部下だ。私の期待以上の活躍をしてくれる。ありがとう。君がいてくれて助かったよ」
「……ありがとうございます」
……誑しめ。

◆

色々あった体育祭も終わり、僕はトガちゃんに誘わるがまま夜の道を歩いていた。
人の姿はまばらになり、蛍光灯の光が僕を包む。
パトロールしているヒーローに僕は手を振りつつ適当にぶらつく。
僕が体育祭で目立ったことと、最近トガちゃんが目立ったことをしていないからか、トガちゃんが連続失血事件の犯人ということには気づいていないようだ。
まさか僕の隣にヴィランがいるとは思わないだろう。
これも体育祭での恩恵かもしれない。テレビの力ってやつだ。
「厭士くん、三位おめでとう！」

「ありがとう。これで僕もヒーローに一歩近づいたね」
ははは。と僕は上機嫌で夜道を歩く。
僕の機嫌は良かった。全てが上手くいったのだ。
自分が楽しく、面白い方へと全てが流れた。
浮かれるのも仕方ない。
「……気になったんですけど。ヒーロー多すぎません？　オールマイトが暴れてヴィランが少ない今、そんなにヒーローっていらないと思うんですよね」
「そうだね。ヒーローとヴィランは表裏一体だ。どっちかが欠けたら片方も消えてしまう。だから僕らは彼らの仕事がなくならないよう頑張ろうね」
「うんっ、なんだか共依存でロマンチックだね厭士くん」
「ははは」
僕らはヒーローたちのために頑張らなきゃいけない。
悪いことをしよう。人に迷惑をかけよう。それがヒーローのためなんだから仕方ない。
しょうがないのだ。
「ああ、そうそうトガちゃん。僕ら今度雄英のヒーロー科を襲うことになったよ。頑張ろうね」

「へー、そうなんですね。いつ頃です？」
「えっとね、ヒーロー科が強化合宿をするみたいだから、そのタイミングかな。僕は状況次第で別行動になるかもしれないけど。……その頃には心操くんも手伝ってくれるかもしれないから仲良くしてあげてね」
「はーいっ」
その頃心操はどうなっているのだろう。
正義心から悪を正すヒーローとなるか、それともその個性を使って立派なヴィランになるか。
もしかしたら中途半端になっているのかもしれない。それが一番彼らしい。
真相は闇の中だ。
なんてくだらないことを考えつつ、僕は体育祭のことを思い出していた。
僕が三位になったのは、僕と同じように準決勝で敗れたものが三位決定戦の出場を辞退したからだ。
スケアクロウが言うにはヒーロー殺しが関わっているらしい。
ヒーロー殺し……彼はどうやらヴィラン連合に一時的に入ったようで、好き勝手させているみたいだ。
ヒーローに喧嘩を売るなんて勇敢だなぁと思う。

わざわざ強いであろう人物を狙うのではなく、一般市民を狙った方が楽なのに。
なんだって楽な方がいい。ヒーローを狙う理由が思想なのだから彼はヴィランには向いていないだろう。
いわゆる、ダークヒーローだ。
ヒーローを敵に回して、ヴィランも敵に回して、一体誰が味方になるのやら。
ああ、一般市民か。なるほど、民衆が味方ならしょうがない。
不自由だなぁ。好き勝手なのがヴィランの売りなのに、自ら縛って勿体ない。
そうやって理屈をこねて、勝てる内はいいが、負けそうになった時潔く負けるのだろうか。
市民を盾にしないのだろうか。
そう考えるとヴィランは楽だ。
失うものもないし、評価も下がりようがないから好き勝手できる。
人生楽にいこう。どうせ一度きりなのだから。
「全部全部、窮屈だ。皆好き勝手出来るのにそれを全部放棄して、馬鹿馬鹿しいねトガちゃん」
「うん、とっても生きにくい！　だから全部ぶっ壊そうね厭士くん」
「物騒だなトガちゃんは。とっても過激でヴィランっぽいぜ」

「だって私、ヴィランですし」
あはは。と二人して笑う。
――個性は性格を映す鏡だ。彼女の個性は変身。好きな人になりたいという彼女は好きな人に影響を受けるようである。最初は会話さえまともにできない時が多々あったが、今では何とも愛らしい女子高生だ。
好きな人に影響されているのだろう。ある程度の常識を持ち、悪人でありながら一般社会に馴染めるような人物だろう。
……誰なんだろう。気になる。
トガちゃんの好きな人って一体誰なんだ。
父親ポジションの僕としては一度相手の顔を見ておきたいものである。
今度スケアクロウにでも相談しようか。それこそ心操くんにでも聞くべきだろうか。
うーむ……相談できる相手がいない。
トガちゃんの好きな人は誰なのだろう。
真相は闇の中だ。

10、楔

「……」

雄英体育祭。それはヒーローの卵が自分を売り込む場であり、それがヒーロー生活の今後を決めると言っても過言ではないほど、重要な行事である。

彼女、芦戸三奈は何も言わず、ただただ天井を見上げていた。

彼女は雄英体育祭で悪目立ちしてしまった。

彼女の個性、【酸】は非常に強力な個性であるが、強力すぎるが故に事故が起こってしまった。

自分の個性は知り尽くしているつもりだったが、彼女の対戦相手――知原厭士という少年の行動一つで全てが狂ってしまった。

酸の恐ろしさは一定の年齢の者は理解している。

酸を弾くような個性を持っていない者はまともに近づくことが出来ないものであると、彼女は思い込んでしまった。それが彼女の失敗だった。

酸が当たらないよう調整すれば問題ないと溶解度を上げ、確実に前に出させないよう

考えた。
が、厭士という少年は何を思ったか酸に当たる範囲に出た。
結果、彼に酸が直撃し、彼の肌は焼き爛れた。
彼が治癒の個性を持っていたが故の故意によるものか、もしくは偶然かはわからなかったが、人を傷つけてしまったというショックは非常に大きかった。
しかもそれをヒーローたちに見られ、クラスメイトにも、そしてテレビで放映されたため全国にその失態が晒されてしまい、ヒーローになるという夢が遠のいたかもしれないという状況に陥っていた。
勿論、彼女は人に当てるつもりはなかった。が、あの悲惨な光景を見れば人は怯えてしまうだろう。
人に安心を与えるという職業であるヒーローとは真逆だ。
人を不安にさせるなんて、ただのヴィランだ。と彼女は頭を抱える。
ショックは大きかったものの、厭士への怒りは無かった。
寧ろ、好感度の方が高かった。
あの時、薄れかけた意識の中、彼女の目に入ったのは自分に駆け寄り、すぐ救護に入った厭士の姿だった。
敵であるにも関わらず、全力で自分の治療をする彼の姿は今でも脳裏に過る。

そして顔が熱くなる。

「……あれ？」

この感情はもしかすると――そして彼女の顔は素っ頓狂な顔になると枕に顔を埋めた。

◆

雄英体育祭から一週間が経った。

けれども全国放映の影響か、放送事故のせいか、彼女は悪い意味で噂になっていた。

勿論、事故であるのは理解しているが、危険な個性であると認識されてしまったのである。

そのため、通学時には人から避けられ、ひそひそと自分の悪口を聞こえるように話され、最悪な気分のまま通学していた。

と、そんな時、彼が現れた。

「あ、おはよう芦戸ちゃん」

黒と茶が入り混じった髪に、深く吸い込まれそうな真っ黒な瞳、そしてどこか地味な印象を与えてしまう極めて普通そうに見える少年――知原厭士だった。

彼は酸の攻撃を食らったにもかかわらず、自分のせいだと言い続け、今もあんなことがあったとは思えないぐらい気軽に挨拶している。
「お、おはよっ……！」
「ははは。今日も相変わらずだね芦戸ちゃん」
「う、うるさい！　ほら早く行かないと遅刻しちゃうよ！」
「はいはい」
誰にも気軽に接することが出来ると思っていたが、彼の前だとどもってしまう。
理由は不明だ。と彼女は自分に言い聞かせつつ、にやにやと笑う厭士の手を引っ張る。
と、先ほど彼女に嫌味を言っていた男が厭士を見て血相を変えてこちらにやってくる。
「おいあんた！　あんた芦戸の被害者の知原じゃねえか！　また酸で焼かれるぞ！」
彼は親切心かそれとも嫌味かわからなかったが、周りに聞こえるよう大きな声で厭士に言った。
「――――」
その時、厭士の雰囲気が変わった。
負の感情ではない。どこか、そう体育祭で見せた人を品定めするような、商品を見る

ような目で彼はその男を見ていた。
「酸で焼かれても大丈夫ですよ。僕の個性は回復ですから」
「……おまっ！　こっちは親切心で言ってるんだぞ！」
「ああ、それは失礼しました。でも大丈夫ですよ。彼女はそんな人じゃありませんので」
「ならなんでお前は怪我を負ったんだよ！」
「そりゃ雄英の体育祭ですからね。怪我の一つや二つ、当たり前ですよ。緑谷くんも酷い怪我だったでしょう？」
「そういう問題じゃねえだろ！」
「そういう問題ですよ」
——怪我に違いなんてありませんから。
そう言って彼はにっこりと微笑んだ。
その言葉に、芦戸はどこか救われるような感覚に陥った。
彼の優しい言葉が、酷く傷ついた心の支えになった。
なんて優しい人物なのだろう。と、彼が自分の勝利のために彼女を蹴落としたという可能性を消し、あれは偶然彼に当たったものであると勝手に認識していた。
恋は盲目というべきか、スケアクロウ直伝の誑しが上手いのか。芦戸はすっかりペースを乱されていた。

現実はマッチポンプで、全て厭士の思い通りという最悪のシナリオだが、芦戸は気づくことなく彼の思い通りに動かされるのだった。

◆

人はいつだって都合の良い言葉を欲しがっている。
必要な人材だやら全て許すやら何やらかんやら。その言葉が故意に吐かれたとしても都合が良ければ疑いもせずその言葉を飲み込む。
人を騙すのに必要なのは誠実さだ。
人に嘘を吐けないような潔白な人間。個性がなく、どこにでもいそうな地味な人間。
そういった特徴がない、普通の人間。そういった人物が一番詐欺師に向いている。
ここぞと云った時にのみ嘘を吐く。それ以外は全て正直に話す。
真実にねじ込まれた小さな嘘に、人は気づかない。
正直者は得をするのだ。
常に誠実であれ。日頃の行いが良ければ人は必ず評価し、人望が生まれる。
僕が与えた影響は中々大きかったようだ。
普通科がヒーロー科を抑えて三位。全国から選びに選んだヒーローの卵が普通科の

少年に抜かれるという事実は明らかに学園の雰囲気を変えた。
まず普通科が彼らに嫉妬することは無くなった。
それらは良いことではない。無意識の内に自分たちより格上であるとしていた者が、自分たちと同等として扱われるようになったのだ。
ヒーロー科として特別な教育を受けているにも関わらず、殆どの者が普通科の少年の下である。
そう、普通科とヒーロー科の立ち位置が同じになったのだ。
勿論、それは厭士の順位であり、彼の実力が普通科と比例することはないのだが、普通科という肩書を彼が強調したことにより、一普通科の人間であると皆は認識したのである。
それにより、ヒーロー科も大したことないな、と自分の成果のように彼らはヒーロー科を自分たちと同じ目線で見るようになってしまったのだった。
それは普通科の生徒だけではない。
テレビ中継によりそれが全国に放映されているのだ。
名門校雄英で普通科の少年が三位というのは中々の衝撃だろう。
ヴィラン襲撃を乗り越えたことによる評価が一気に転落した瞬間である。
雄英のブランドがそれだけで落ちることはないが、非常に不味いのは確かだ。

だからだろう。

ヒーロー科への編入の誘いが来た。

そう、ヒーロー科が落ちぶれたのではなく、僕がヒーロー科に編入出来るレベルだったということにしたいのだろう。ちょうどヒーローになりたがっていたのでちょうどいいと特例で急遽僕の編入が決定したのだろう。

僕さえ編入させれば僕の評価が上がり、ヒーロー科の株はこれ以上下がることはないというお互いに損はない提案を出したのだろう。

……どうしようかな。

僕としてはもうヒーロー科に入る意味がない。

心操への追撃にもいいかと思うが、下手をすれば僕を憧れにし、ヒーローへの願望がより強固なものになりかねない。非常に難しい選択だ。あまり選びたくないというのが本音であるが、ここで断ればヒーロー科を目指す普通科の少年というキャラが崩れてしまう。

つまりは、もう一択だ。

選ぶしかない。僕はこのまま普通科からヒーロー科へ編入というシンデレラストーリーを歩むしかないのだ。

まあ、すぐに編入ではなく、向こうの準備が終わり次第ということだそうだが。

ヴィランがヒーロー科の最高峰に入るとは中々面白い話だと思う。
このままヒーローになるのもありかもしれない。
……いやないか。僕にヒーローは向いていない。
皆を救うなんて僕には無理だ。
誰を犠牲にしないなんて、僕には出来ない。
誰かが損をして、誰かが得をする。誰もが救われるなんて僕には出来ない。
僕の個性では誰かが損をする。
ヒーローは好きだし、ヴィランも好きだ。
でも誰かも知らないような人を助けるのは好きじゃない。
普通で個性もないような者を助けて、何が面白いのだろう。
金のためと割り切るべきかもしれないが、それならヴィランでいい。
金も手に入るし、好き勝手出来るヴィランの方がいい。
何が楽しくてヒーローになるんだろう。
芦戸ちゃんにでも訊いてみようかな。
僕は放課後彼女に会えるかどうかラインし、普通科にいる部下に僕がいなくなった時のために引き継ぎをするのだった。

◆

「そういうわけで今回もよろしくね。調(しらべ)ちゃん」
「はイ、イやしさん。こんかイは誰にしますか？」
「そうだね。とりあえず緑谷くん辺りをお願いしようかな」
「りょうかイです。では――」
そう言って〝い〟の発音が独特な彼女は自身の持っていたノートを開く。
その【一年Ａ組】と書かれたノートを開くとＡ組の生徒たちの写真と事細かく書かれた詳細が載っている。
ただ、一人一人に要されたページが多いにも関わらず、空欄が多い。
と、その空欄に彼女は手をかざす。
すると、その空欄に文字が現れる。
『【三】緑谷出久はオールマイトに育てられている』
「……それはヒーロー科全体に言えることだね。もう少し回数を重ねないと難しそうだ」
「そうですね……これじゃスクープになりません。もっともっと調べなイと……」
そう言って彼女は歪んだ笑みを見せる。

彼女――人見調（ひとみしらべ）は僕が口説き堕とした普通科の少女だ。
彼女の個性、【情報収集】は彼女の左目で見た人物の情報一つを紙に写すことが出来る。
その人物の情報レベルは書き記せば書き記すほど貴重かつ本人しか知らないような情報となる。
ただ、個性は一日一回。二十四時間に一回しか使用できないというデメリットがある。
なので使用する人物は選ばないとこのように無意味な情報で終わってしまう。
「ありがとう調ちゃん。君にはいつも助けられてばかりだね」
「イっ……！　イえイえ！　そんな……役に立つようなことはしてませんし……！」
そう言って彼女は顔を赤らめぶんぶんと首を横に振る。
なんて謙虚なんだろう。とてもヴィランらしくない。
まあそれが彼女らしさというやつなのだろうか。僕の部下にするには勿体ないぐらい強力な個性を持っている。
彼女の個性によりヒーロー科の個性は大体把握できた。
僕が三位という成績を残せたのも彼女のおかげだろう。
「謙遜しないでよ。君は優秀だ。そして僕には欠かせない存在だよ」

雄英での情報収集は彼女がいなければ失敗に終わるだろう。
彼女の個性は重宝すべきものだ。一日一回というデメリットはあるものの、確実に一つ情報を得ることが出来る。そして彼女は新聞部なので情報を調べていても別に文句も言われない。
寧ろ、それが部活動であるため怪しまれることはない。
最高の部下だ。惚れ惚れしちゃうね。
「〜〜〜〜っ!!」
……ただすぐ赤面するのは駄目かな。
理由は定かではないが、時折顔を真っ赤にして口調も変になる。
そういえば芦戸ちゃんもそうだっけか。
あれ、僕のせいじゃないかこれ。
今度トガちゃんにでも訊いてみようか。
後日、僕はトガちゃんに刺されるのだが、それはまた別の話。